

関東氷上郷友会

昭和五十五年四月

第11号

山
々
々



文苑





渡辺紙工業株式会社

取締役会長 渡辺金三 取締役社長 岡崎一二郎

本 社	大阪市城東区今福西 3 丁目 2 番 24 号 Tel 939—1281(代)
東京支店工場	東京都足立区中央本町 5 丁目 22 番 12 号 Tel 849—6611(代)
" 関宿工場	千葉県東葛飾郡関宿町大字台町 2192 番 Tel 0471—96—1489(代)
東京支店営業所	東京都台東区柳橋 1 丁目 20 番 4 号<久月ビル 8 F> Tel 861—2331(代)
名古屋支店工場	名古屋市西区又穂町 3 丁目 13 番地 Tel 521—8111(代)
大阪支店 工場	大阪市城東区今福西 3 丁目 2 番 24 号 Tel 939—1281(代)
九州支店 工場	福岡市博多区堅粕 3—16—14 Tel 411—4237(代)



渡辺製袋株式会社

取締役社長 渡辺金三

本 社	大阪市城東区今福西 3 丁目 2 番 24 号 Tel 939—1281(代)
東京支店	東京都台東区柳橋 1 丁目 20 番 4 号<久月ビル 8 F> Tel 861—2331(代)
大阪支店	大阪市城東区今福西 3 丁目 2 番 24 号 Tel 939—1281(代)
藤岡工場	栃木県下都賀郡藤岡町内町 4938 番地 Tel 028262—3321(代)
兵庫工場	兵庫県加古郡稲美町蛸草 1438—1 番地 Tel 079495—0257, 0401

民謡ブームに乗る春日小唄

民謡ブームに乗って、春日町にも春日小唄が生れた。
町民は祭りの度に踊って士気高揚につとめているとの事

春日小唄

作詞 和田たけし
作曲 谷垣 譲

一、春の城山 おほろにかすみ

昔ながらに 桜が匂う

ゆかしその名も 春日の里は

蝶も来て舞う 蝶も来て舞う 花の宿

二、夏は涼しや 日ヶ奥谷の

雄滝雌滝の しぶきに濡れて

若い歌声 こだまに返す

山の緑が 山の緑が 目にしみる

三、夜霧朝霧 三尾のふもと

熟れてうれしい 野山の幸よ

香り豊かに 見目うるわしく

ほんに春日は ほんに春日は 味どころ

四、いで湯湯の町 粉雪に暮れて

つもる想いは あの娘の胸に

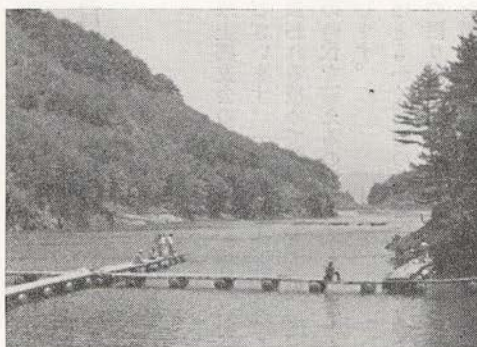
とけてうれしい 愁の里の

丹波春日は 丹波春日は 粋な所

(春日広報より転載)

位置 春日町は、兵庫県の中央東部に位置し丹波の国では、山陰道の東端にあたり、東は山城、近江、北は若狭、丹後、西は但馬、南は播磨と摂津の国々にかこまれた海のない山国で、当町の総面積は76.8km²である。

町の中心を東西に国道17号線が走っており、また国鉄は、福知山線黒井駅が町の中心部にあり、京阪神との距離は共に2時間程度で結ぶ位置にある。



国領大池のつり堀風景

更に、高速近畿自動車道舞鶴線の開設にともなう設計測量が現在実施されており、町東部にインターチェンジが設置されることから、京阪神との交流は1時間(80km)に短縮されることになる。

山ざる 第11号 目次

表紙画『花菖蒲』	常岡 文亀	
会員への御挨拶	足立 三治	2
西川、菊地両氏へ記念の祝寿杯を贈呈		4
足立会長に感謝状贈らる		5
心に通うふるさと作り	石井 敏秋	6
ご高配を感謝	大田 勝	7
なぜ、代議士が出ない	藤原 三郎	7
丹波に残る「いの字」の地名	荘 正衛	10
教育現場の近況と所感	坂本 重雄	12
坊主と弁護士	小杉 武生	13
余暇	吉住 重造	15
ひとり残されて	藤尾ちゑ子	17
日中鍼灸術くらべ	小川 晴通	18
夢追い猿奮闘記	渡辺 隆男	22
科学技術についての思い出	有田 喜一	26
建築と歴史	伴仲 信次	29
『ふるさと村』開村記	須原 清	31

会員への御挨拶

足立 三治

関東水上郷友会の皆様、古里の皆様、明けまして御目
出度うございます。一九八〇年代は私共にとって有限の
時代と云われる極めて危険ではあるが、反面、また新し
い発想の時代を迎えるのではなからうかと私なりの思
いが致します。

なにはともかく何時の時代においても各人が身分相応
に、力の限り対応する精神とさらに健康にして生きるよ
ろこびを感じ、感謝することが最も大切ではないでしょ
うか。

現在社会は私達の想像を絶するような驚くべき現実が
次々と出現しておりますが、このような社会を皆さんは
どう判断され、かつ理解されているか。気掛りで日常生
活の前途に対して深い戸惑いを感じる今日この頃であり
ます。

しかしながら、こんなセンチメンタルな事ばかりを考
えていては、我が人生にとって決してプラスではないと

東北にて……………	大野 善三……………	32
懐かしいクラス会……………	足立 治……………	34
ふるさとの松茸狩り……………	木村つた江……………	34
日本舞踊ひと筋(上)……………	西崎 祥……………	36
『西崎祥の会』盛況……………		40
常岡画伯日本画展開く……………		40
短歌……………	藤本 久一……………	40
ヨーロッパに旅して……………	秋元多美子……………	40
本の紹介『十年の歩み』……………		41
『氷上郡の文化財』『再建工作』……………		43
関東氷上郷友会の沿革／会則……………		44
常岡文亀画伯逝く……………		44
父、文亀のこと……………	常岡 幹彦……………	44
五四年度総会開く……………		46
新役員決る／会計報告……………		47
お便り・短信／計報／新会員紹介……………		49
年会費領収報告……………		58
関東氷上郷友会会員名簿……………		59

心に誓いながら、新しい年を迎えるに際して年輪の豊かさを自覚しつつ自己の進むべきプランニングを決めて行き度いと思います。

その第一目標は正直者が馬鹿を見ない社会作り、そして我が人生に悔いなき正しい行動と情熱を持って、真の英智を注ぐ様に努めて参りたく思っております。

さて、関東氷上郷友会に關しましては、常日頃役員各位の御協力によつてますます隆昌の一途を辿りつつ、発展致して参りました事は誠によろこびと感謝に堪えません。また過般の定時総会におきまして、西川先輩他皆様の福寿を心からお祝いする事が出来ました。さらに不肖、私に対しまして、毎年我が郷里から御臨席を頂いておりました氷上郡町村長会長より過分の感謝状(別記)並びに記念品まで頂戴する光榮に浴し、ただ／＼恐縮を致しております。これもすべて御支援を頂いた役員各位の御蔭と深く感謝致しております。

誠に不策ながら今後とも、誠実に奉仕活動が続けて参る所存で御座います。会員各位、郷土の皆様へのま／＼のご繁榮と御多幸を祈念致しましてここに巻頭のご挨拶と致します。

(関東氷上郷友会会長)

西川、菊地両先輩に

記念の祝寿杯を贈呈

本年度の『祝寿の会』は総会に先立ち、さる十一月二十三日の勤労感謝の日の銀座の会場に設定され、多くの会員の祝福のうちに開かれた。本年は右記六名の方々をお招きしたのであったが、それぞれ支障が出来て、二名の出席で淋しかったが、それでも

西川政一、菊地武利

の両氏ともお元気な姿で会場に現われ、

足立会長からお祝いのことは受けられ、記念品をお渡しした。

これに対し、西川、菊地両氏から謝辞があり、会員一同の祝杯を受けられて、祝典を終った。

尚、当日出席出来なかった四氏には記念品を別送して祝意を表した。これに対しそれ／＼左の如き謝辞が寄せられた。

謝 辞

片山日幹氏

ご招書頂き御厚礼申し上げます。是非とも参上し度く存じますが、小生十一月十九日と十二月五日は印渡仏跡参拝団の団長として出かけ



祝寿の会で記念品を受ける右より、菊地武利氏・西川政一氏・足立会長・石井敏秋氏

ますので残念ながら次席させて頂きます。御厚情に対し誠に心苦しく存じますが、御了承願ひ上げます。

塩見つるゑさん

過日は、貴重なお祝いの記念品を頂きまして誠に有難く厚くお礼申し上げます。

思えば五十年も昔家族一同こちらに來ましてから、関東大震災や東京大空襲にも無事で過ごさせて頂きました事を神様のお陰と感謝して暮らしています。主人も長い間東京都庁に勤めていましたが、もう米寿を迎えました。私も八十二歳になりましたが、故郷の柏原女学校の同窓生も大方亡くなり大変淋しく思います。私の生家は市島町の徳尾村ですが現在中央線の西萩窪の南で駅から三分位の処です。

永井輝江さん

私の長寿の祝に結構な記念品を有難うございました。出席かなわず申し訳ありません。郷友会の皆様によりしくお伝え下さい。御盛會を祈ります。

松本源吉氏

私の長寿に対しご招宴の案内を賜わり有難く存じて居りましたところ折悪しく台湾旅行と重なりましたため参上いたしかね誠に申し訳なく存じました。その節はお心厚い記念品をご恵送頂き御厚志誠に有難く厚く御礼申し上げます。

足立会長に感謝状贈らる

氷上郡民を代表して

感謝状

足立三治殿

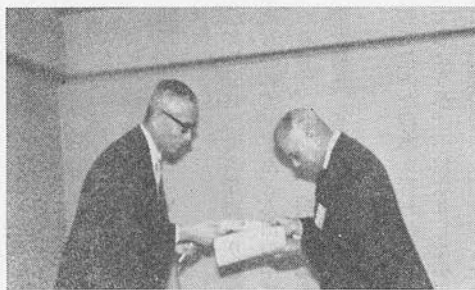
五四年度記念席上、氷上郡町長連絡会会長石井敏秋氏から足立会長に対し別項の如き感謝状並びに金一封が贈られた。

あなたは永年に渉り関東氷上郷友会会長として郷土出身者の親睦をはかりつゝ、郷土の発展のためにご尽力下さいました功績は誠に多大であります。よって記念品を贈り深く感謝の意を表します

昭和五四年一月二三日

氷上郡町村長会長

石井敏秋



石井氷上郡町会連合会長（向って左）から感謝状を受ける足立三治会長

心の通うふるさと作り

氷上町長 石井 敏秋

関東氷上郷友会の皆さん御元気にそれ／＼の分野で御活躍のこと心よりお喜び申し上げます。ふるさとに常に思いを致されて、郷土発展のために物心ともに御協力下され有難く感謝致します。

何か町で大きいことでもする時には、何かと御無理ばかり申し上げています。全くふるさととは寄付や、無理を申し出るところとなりかねない昨今でありまして、恐縮に存じています。

年一回の総会には各町長と必ず出席させて頂き、せめてその時にふるさとの近況を御報告の責任があることを充分心がけておりながら、公務繁忙で失礼することが多く申し訳けなく思っています。

多年の念願でありました福知山線の篠山までの複線、城崎までの電化が本格化して工事着工されました。

中国縦貫高速道路の三田か



石井敏秋氏

ら分れて舞鶴までの近舞線も用地買収に入っています。これは春日町棚原附近にインターが出来る設計です。こうして交通は便利になり、丹波の様相も変化が予想されており、各町もこの計画に呼応する計画をたてております。

御承知の通りの経済情勢ですし、特に生活文化の変化は米の消費が少なくなり、米の過剰に対応する水田利用、再編成という難しい文句で農業の変革が要求されています。

現在の農業は機械化されて、早乙女の田植風景は昔物語りとなってしまっております。田も整理が順次行われて、どんだん田の中にも自動車が行けるようになり一変しております。しかも、美しいふるさとの山川さえ、川は改修されて昔の姿を替え、また山も所々削れている昨今であります。

昨年は国際児童年で、子供に対して色々な行事も行われましたが、得てして本当に子供は幸せでしたでしょうか。小魚取りした小川もなぐ、自然離れの昨今です。こんなことでは丹波の人情は浅くなっていくような気がします。

過ぎにし昔になすよしもありますが、せめてふるさととは心の通うものでありたいと念じております。

自然を守ってわれ／＼のふるさとづくりに各町が連携し努力しております。東京からは五時間で丹波に帰れるようになりました。折あらば御帰郷されて、我々を御指導、御鞭撻をお願い致します。

何か一文をとの申しつけがありました。言葉足りませんが、皆々様のます／＼の御多幸をお祈りして。

(氷上郡町村長会長・氷上郡広域行政事務組合管理者)

ご高配を感謝

氷上町議会議長 大田 勝

拝啓 日頃は郷土氷上のために格別のご高配を賜わり厚くお礼申しあげます。

さて、貴会発行の機関紙「山ざる」を毎号ご惠贈賜わりありがとうございます。誌面の中で数多くの知人の近況を知ることができてたい

なぜ、代議士が出ない！

丹波の自民党敗退に思う

藤原 三郎

(氷上・稻継)

昨年の総選挙ではご心配をおかけし、また親身にも及ばぬお力添えをいただきましたのに、私の不徳のいたすところ、折角のご期待に反する結果となりましたこと本当に申し訳ありません。深くおわび申し上げますと共に、みなさんのご温情を無にいたしましたこと返す／＼も残念でございます。

一、残念至極の結果

へん懐かし、うれしく存じております。

郷土を後にして激動の社会を乗り切ってこれ、立派に成功され、かつまた社会に貢献されている皆さん方からわがふるさとを懐かしみ、こよなく愛していただくお気持ち、只々感謝にたえません。それだけに郷土を預る者として、ふるさと氷上の発展のために懸命の努力を続ける所存であります。

今後とも郷土の発展のために何かとご指導、ご助言を賜りますようお願いするとともに、会員皆さん方のますますのご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げます。

もし私に議席を持たせていただいていたら、ああもしたい、こうもしたい、丹波発展のため有田喜一先生の積残された学園都市構想をはじめ、その他のことも微力ですが、少しでも前進をはかりたいと思う毎日ですが、これも天が与えた試練と考え、次回を期して頑張る所存ですので、よろしくお導き下さいますよう、お願い申し上げます。

しかも郷土のみなさんが、選挙中運動費がなくなつて私が立候補を中途で放棄したとか、又それを裏付けるため法定ビラをはがされたりするような選挙妨害や、悪質なデマや中傷の中にあつて、ひたすら私を信じ、終始ご支援をいただいたご厚情は今でも深く脳裡にやきついております。

そしてこれらの方々のご期待にお応えするためにも、真に丹波の明日のためにも、国のためにも、デマや妨害、ウソではまかり通らぬという社会正義のためにも、なんとしても再起して、ご期待にお応えせねばならないと堅く決意しております。



藤原三郎氏

そのためには、まず私というものを知っていただくことが大切であり、多くの人々に選挙中のあのいろんなデマや中傷が本当であったか、どうか確認してもらうことから始めねばなりません。そしてよりご理解をいただき、正々堂々と進めてゆく決心でございます。

二、自民党が敗れたわけ

今回の総選挙で自民党が大きく後退したことはご高承の通りです。石油問題や物価問題、これからの世界情勢や、国の台所のこと、引いては丹波のことを考えるとき、安定政権と強力な政治体制が必要なこととは言をまちません。しかるになぜ自民党が選挙前の評判をくつがえして敗れたのか、むろん原因は増税問題や、いろんな悪い条件が重なったこともありましよう。むろん私も政治行政の整理や合理化をせずして、いたずらな増税には反対ですが、しかし私は公認の乱造と党籍証明の乱発にも敗因の一端があると思います。

兵庫県第五区の場合、定員三名に対し自民党よりの立候補者は二人というのが、いままでの慣例です。常識であった訳です。だから自民党兵庫県連及兵庫県選出の衆参両院議員の間では兵庫五区は現職の自民党一人の公認の他に新人一人を公認するということで進められた。

そして、県自民党の実施したアンケート調査結果の圧倒的な数字や党歴及び有田先生の後継者ということで、藤原が適切ということになり、県下衆参両院議員総会でも総員十三名中、八名が藤原の公認賛成、一人が反対、中立四名という圧倒的多数であった。しかるに、自民党のある一幹部が自己の利害、情実から藤原公認に断固反対しさらに公認決定の直前には、ある人の後援会長と名乗る人が自民党本部に乗り込み、話合いで藤原が立候補しないことになったとのウソの報告を行い、遂に兵庫県第五区からは現職一人の公認の他に二人の党籍証明ということに決った次第です。

この結果丹波から前回二回に互って代議士を選出出来なかったのであるが、こうした事は兵庫五区だけに限らず、全国あちこちでもこのようなことがあったことに思いをいたす時まことに残念至極であります。

三、丹波の将来と私の決意

私は国のためにも、丹波のためにも、民主政治の発展のためにも、また自民党のためにも、石にかじりついても頑張らねばならないと思っております。

そして私が強く思うことは、丹波に無関係の人々の迷惑や利益のために丹波が犠牲にされてはならない事です。また大勢の人々が真実を見極めることなく、ウソやデマにまどわされる誤った現実だけはなんとしても無くしたいと念じております。したがって私は今後もしたずらな策をろうすることなく、真実を訴えてゆく決意であります。

地方自治が叫ばれて久しくなりますが、三割自治はおろか、二割、一割自治になりつゝあるとの丹波の現実、すべてが国や県の補助や助

たとえそれがどんな小さいことでも一つ／＼の積重ねが丹波をよくし、また住みよくしてゆくことに思いをいたすとき、どうしてでもないままでの経験を生かしてお役に立ちたいの一念にもえております。そして一方丹波と大消費地の距離を近くする交通道路網の拡充整備などとも是非やり度いことの一つでもあります。

幸に有田先生のもとで国会に長年働いてたため、中川一郎農相（大野伴陸氏秘書）や稲村利幸自民党副幹事長ら秘書出身の国会議員が百名を超えるようになり、また、私もかつて秘書会会長などもやってこれら国会議員とはみな仲間うちでございます。従って一つの省庁に限らずそれだけ巾の広い活動が出来ると自負し、またお役に立てると信じております。

どうぞ今後とも同じ丹波人として絶大なご支援を切に御願ひ申し上げます。(五四・一二・一三)

総選挙の結果

八〇年代の政治の方向を問う第三十五回衆議院議員総選挙は昨年十月七日に兵庫五区でも三百七十一投票所で午前七時から一斉に投票が始まった。投票は一部を除き午後六時に締め切れ、美方郡浜坂町の

同六時五十分を皮切りに各市町で即日開票が行われ、同八時四十分ごろ佐々木氏が、同十時には谷氏と伊賀氏の当選が相次いで決まった。この結果『丹波から代議士を』という二回にわたる総選挙の夢が無残に破られたわけである。

この日は台風18号の影響で朝から雨にたたられたが、激しかった選挙戦のあとだけに有権者の関心は高く、出足は好調、五区全体の投票率は前回(五十一年十二月五日)を回(一五%上回る八六・八七%)。丹波では自民党の新人二人が激しくせりあつた水上郡は前回は一・六八%上回る八八・三四%の高率を示し、町別の最高は市島町の九二・九七%、最低は柏原町の八五・七七%。これに対し多紀郡の投票率は八〇・七九%で、対

第35回總選挙兵庫第5区得票数										
(乃は得票順)										
	佐々木良作	谷 洋一	伊賀定盛	西山敬次郎	藤原三郎	前田貞夫	今井品三	当日有権者数	投票者数	投票率%
水 上 区	7,883 (811)	1,324 (185)	4,029 (778)	19,051	1,802	1,129	139	35,388 (35,411)	46,129 (46,181)	86.34 (86.97)
柏原区	1,586 (311)	1,354 (185)	1,603 (778)	1,902	1,802	1,129	30	5,425 (5,425)	4,886 (4,886)	89.71 (89.71)
水上町	1,586 (311)	1,354 (185)	1,603 (778)	1,902	1,802	1,129	30	5,425 (5,425)	4,886 (4,886)	89.71 (89.71)
野畑町	1,586 (311)	1,354 (185)	1,603 (778)	1,902	1,802	1,129	30	5,425 (5,425)	4,886 (4,886)	89.71 (89.71)
春日町	1,586 (311)	1,354 (185)	1,603 (778)	1,902	1,802	1,129	30	5,425 (5,425)	4,886 (4,886)	89.71 (89.71)
山附町	1,586 (311)	1,354 (185)	1,603 (778)	1,902	1,802	1,129	30	5,425 (5,425)	4,886 (4,886)	89.71 (89.71)
市島町	1,586 (311)	1,354 (185)	1,603 (778)	1,902	1,802	1,129	30	5,425 (5,425)	4,886 (4,886)	89.71 (89.71)
多 步 区	1,586 (311)	1,354 (185)	1,603 (778)	1,902	1,802	1,129	30	5,425 (5,425)	4,886 (4,886)	89.71 (89.71)

兵庫五区開票結果
當選 六九六三九 佐々木良作
當選 三七八七三 谷 洋一
當選 三六〇二二 伊賀定盛
落選 二八四四八 藤原三郎
落選 二〇四三七 西山敬次郎
落選 一四四七二 前田貞夫
落選 七二〇一九 今井品三

前回比二・六一%の落ち込み。各町とも前回を下回った。

(丹波新聞による)

丹波に残る「いの字」の地名

在京都 荘 正 衛
(柏原)

朝鮮半島の歴史を繙くならば、古くより高麗・新羅・百済の三国が互に鼎立して死闘を繰り返して来た。そして新羅百済は高麗の攻撃を受けて、我が国へ救援を求めて来たことも屢々あった。朝鮮が現在でも南北に分かれて対立しているのも原因はその辺にあると思う。ある時は新羅が、またある時は百済がその王室を含めて少なくとも万を超える群団が、財宝を携え祖国を後にして脱出を企てた。現在いう処のポートビープルを現出し、無数の舟が朝鮮海峡を南下したことであらう。

釜山市の背後の丘から晴天の日に海上を眺むれば彦岐、対馬の島影が遙かに見えるという。彼等が小さな舟に乗って追撃をのがれ、対岸に見える土地を探めて漂泊の旅に出たことに何の不思議があらうか。百済の難民は対馬海峡を乗り切って一挙に北九州へ上陸したものが多かったのは当然であらう。

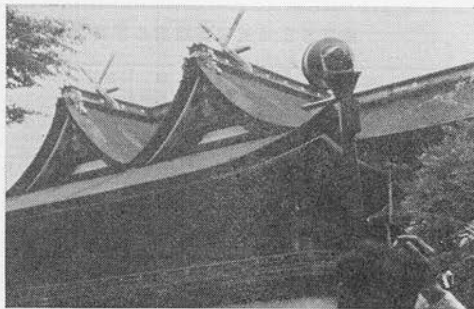
しかしそれに反して新羅系の群団は、対馬海峡を目の当りに見ながら日本海の海流に流されつつ、まず最初に辿り着いた処は出雲海岸で

あった。また丹後若狹の海岸、能登半島に漂着したものもあったであらう。

日御崎に上陸した一団が漸く斐伊川にさしかかった折しも、電鳴にわかに轟き天を突く豪雨が河面に氾濫し、上流から押流されてくる砂鉄が、川の流れを真赤な血の色に染めた光景を見た時、彼等は八岐の大蛇がのたうつ姿の幻覚におそわれたことであらう。

難破船から因幡の海岸に辿り着いた白衣の人々の姿は白い兎のように目につく、因幡の白兎の物語りを生んだのである。また、白衣白髪の渡来人を始めて目の当りにした原住民にとっては、こうごうしい神々とも思われたのかも知れない。

また一団は大山の山麓を南に出て、吉備原野に留って吉備王国を形成するが、彼等もまた、出雲大社よりもなお遙かに巨大な吉備津神社を建設している。現存する造山古墳は仁徳・応神の腹中陵に次ぐ全国第四位の大きさであることを思うにつけても、大和王朝との深いつながりが想像せられ、少なくとも彼等渡来人は建築、土木、技術等においても高い文化水準にあったことがうかがえる。



国宝「吉備津神社」は吉備津造りといひ日本建築の傑作。広さは出雲大社本殿の2倍以上。



莊 正衛氏

また一団はなおも北進して若狭の海岸に上陸、鑓達陸路山城太秦と近江琵琶湖畔のルートに分かれ、大和王朝に対する二つの強力な橋頭堡を築くこととなる。

京都太秦の広隆寺の弥勒菩薩半跏思像（国宝第一号）は我が国最古の木像であるが、これは明らかに彼等の持参したものであり、これと全く瓜二つの同じ像が現在韓国に実存している。また、滋賀県の湖東地方にかなりの群団が植民化していたことも現在の遺跡からもはっきりしている。

ここで不思議に思えてならないことは彼等の通つて来た道が、概ね「い」の字に始まる地名が多く出てくることである。

彦岐・石見・出雲・因幡・国ゆずりの神話で有名な稻佐の浜も「い」に始まる。

まだ文字のない時代、古代人が未知の土地への道しるべにごく自然に口から出るであろう、いろはの「い」の発音がことの葉の一片となつて残していったのかも知れない、というような思いにかけられる。

いま一つのルートは陸路出雲・因幡を経て、これも出石・生野・石生・伊丹・和泉・生駒・伊賀・伊勢へと「いの道」を次第に南に辿り、大和朝廷との関わりを持つようになつたのであろう。

兵庫県出石の出石神社には新羅の人のもたらした宝物が現存しているし、奈良の生駒もまた高麗系の渡来人の拠点であった。

丹波大江山の元伊勢には現に伊勢神宮と全く同型式の内外宮が現存している。始めここに落付いて冬を迎えた神々が、なお南方に暖かい住みよい土地が在るとして移転したという、土地の伝説が今も残っている。

伊勢神宮に現存する「神代文字」というのは明らかに朝鮮文字の変形で古代に使われていたものであろう。

神宮で行われている舞楽は装束の上でも全く朝鮮のものを残している。

丹波にも彼等の繁く通つたであろう痕跡が残っている。柏原見長にも古代人の住居とおぼしき横穴が現存している。

開化天皇の妃となつた竹野媛は丹波大泉主の娘であり、その子孫が丹波一円に拡がったといひ伝えられている。

年一度位は彼等は思い出の地出雲の故郷に集つたことであらう。出雲大社の傍に建てられてある「東西十九社」は神々の帰郷を待ち受けるかのように並んでいる。神在祭の日には全国各地から帰郷の神々の姿で境内は賑わつたことであらう。

追記要旨 Ⅱ本文については三年ほど前、母校のクラス会で松江へ一泊旅行をしたときの事を「松江の印象」としてクラス誌に載せたものの一部を「丹波に残るいの字」なる一文として書き直しました。平素抱いている日本民族への限らない追想の一片に過ぎません。

尚、序でながら、先般神戸新聞に掲載の連続記事に「学校人脈Ⅱ柏中高女」執筆上田三四二氏を読み、氷上郷友会員でもあつて、非常に

よく書かれていますので驚きました。本業は医師との事、余技として大したものです。また小原流挿花十一月号にも『復酒絶煙』な華麗な随筆が出ていました。為念。なお同氏は歌人としても著名である（松）。

教育現場の近況と所感

坂本 重雄
(柏原)

新春の年賀状を拝見し整理していて、最近の数年間、故郷の人々や学生時代の友人との文通がふえ、旧交を温める例がふえていることに気づいた。四〇代の年令になると、同窓会の集りも自然に盛んになるようで、その一つとして、今年の五月一日（日）には、郷里の丹波・柏原において、柏原高校三回、併設中学一回の合同「同級会」の開催、そして「記念誌」の編集・発行が、同窓生仲間で計画され、仲間の期待をあつめている。

この記念誌への寄稿のために、年末の多忙の合間に、中学・高校六年間の想い出の記録や写真を整理し、学園生活や恩師・友人の想い出をつづるといふ楽しい時間をすごすことになった。一九四五（昭二〇）年三月に柏原の崇広小学校を卒業し、四月に（旧制）柏原中学に入學し、八月に終戦を迎え、混乱の時期をすごした想い出、しかし新制柏原高校への編入学を認められて入試のなやみは解消されて、六年間、

楽しい記憶の方が印象ぶかく残る青春時代を、あの丹波の自然環境、そして恩師、友人をはじめとする人々の親愛の情にはぐくまれて送ることができたのです。

進学や就職で郷里をはなれ、両親もすでに亡くなったために、丹波をおとずれる機会はすっかり少なくなっていました。最近では、年とともに丹波のことを想い出すことが増えていくようです。

昨年の一二月に、勤務先の大学で「永年勤続」の表彰を受けたさい、大学の助手に採用され二つの大学での期間を通算して二〇年が経過していることに、われながらおどろいてしまいました。自分の仕事とのかかわりで、教育機関のあり方や入学試験制度の改善などについて論議してきたものの、最近の教育現場の問題にふれ、また自分の子供たちがその年令になってくると、進学競争にまきこまれざるを得ない若者とその家族たちのなやみを深刻に受けとめざるを得なくなってきました。

見聞するかぎりのことですが、大学についても、近年、学力の差をとわず、あまりにも「素直すぎる」若者がふえ、一〇余年前の学園紛争が夢のように思われ、あらためて、若者を元気づけ、充実した学生生活を享受させるには、学校や教師がどのような協力をすべきかを考えさせられる。

大学における教育内容については世間の関心、ときには批判も多いため、カリキュラムの再編など大学間や大学内で随分論議もし、改革の試みも行なわれているが、伝統的な教室での講義を主体とし、学生の自発的学習に期待する方式と並行して、教師の専攻分野ごとのゼミナールや演習では、二〇名以内の少人数教育で厳しく訓練する方法が

あげられる。しかし、講義への出席率は良くてもノートをとるばかりで質問などはあまりなく、平凡な答案をかって自説が展開できない例が多く、自主的学習に至ってはさらに困難となる。ゼミナール指導でも相互に親近感をもつまでに時間がかかり、懇親会や合宿などをつみ重ねないと成果があらわず、これを実践するには、教師の側によほどの熱意、そして若干の時間的、経済的余裕を必要とするようです。

教育の制度や方法について論議をつくす意義は大きい、それほど



長野県松原湖の夏合宿で学生とともに

名案が出るものでもない。個人的な感想をいえば、近年の教育制度のもとでは、人間の個性を尊重する態度が欠如し、政策や教師の側で、画一性や平均的効果にこだわりすぎることである。さらに、教育サービスの受け手（生徒の場合は父母を含めて）の側の、教育の内容、方法への要請が不明確であり、それが明確となっても、教育する側の理論や指導方法に対して、教育を

受ける権利者の要求ないし期待が反映されにくい点に問題がある。

さらに、高令化社会に向けて、中高年令層の私たちが、自らの職業に関する再教育にとどまらず、老後の人生の充実のために学習の機会を求める気運もたかまっている。教育機関をもつと国民に向けて開かれたものとし、社会教育にもつなげていく必要性を痛感しておりま

—一九八〇・一・一四—

（静岡大学教授、静岡市在住）

坊主と弁護士

小杉 武生

（青垣・小倉）

青垣町（もとの佐治町）小倉の曹洞宗薬王山法光寺の坊主の二男に生れて、どういう訳か法律家の端くれになつてしまった。

父は寺の境内を使って佐治保育園を開いていたが、私が弁護士になる前に他界したので、弁護士になった私の姿を見ずに終ったが、遺言の中に「恵まれない人の為に弁護しろ」と書いていたことを憶えている。大学時代の友人が酒に酔って電話をかけてくると、このことを彼も憶えていて、いつも「君のおやじの遺言を憶えているか」と持ちかけてくる。

とにかく田舎者の私であつたので、弁護士のなんたるかをよく理解



小杉武生氏

しないまま、なんとなくあこがれて弁護士になろうと思いき、苦勞の末に目的を達して現在に至っている。もともと未だ駆けだしの弁護士で、本当のところは弁護士の何たるかは今でもよくわからない。とにかく、なってしまうので落着いて考える精神的余裕もなく、ただ懸命に日を送っているのが現状である。

現在私に言えることは、弁護士という職業が坊主のそれとよく似ているということである。どこが似ているかというと、悩みを持っている人を救うことを主な使命とする職業であるという点である。弁護士という、世の中の人は、悪徳弁護士、善良で無知な人を欺してたまり儲ける職業と誤解している者も一部にいますが、決してそうではない。裁判官、検察官を含め法曹人一般に言えることだが、弁護士というのは金銭に淡泊で仕事そのものに熱中し、仕事をするそこそのものに生甲斐を感じている人種である。

依頼者から仕事を依頼された場合、この依頼者の為に一生懸命になり、どうしたら喜んでもらえるか、どうしたらよい結果が得られるか、どうしたら依頼者を救えるか、ということだけを考えている。弁護士は、依頼者のために依頼者のかかえている悩みを依頼者に代って解決してあげる職業であり、一方坊主も本来、人間が真の意味で人間

らしく生きる（真人として生きる）ためにはどうすればよいかを悩んでいる人に、生きることの意味の何たるかを悟らせることを使命とする職業、すなわち、自らの生きざまで、悩んでいる人を救うことを業とするものであり、ここに共通点がある。

私自身、お寺に生れながら坊主にならなかったが、実感として、弁護士になってみて、結局弁護士になっても、坊主になっても人の悩みを救う仕事に変わりなく、私自身、人を救う仕事につく運命にあったのかと、つくづく不思議に思っている。

それなら何も苦勞して弁護士などになることもなかったのかも知れないが、坊主より生臭い仕事で（もともと生臭坊主という言葉もあるが）面白いし、人の救い方がより現実的で、やはり弁護士になつてよかったと思っている。

ただ、私は仕事をするにつき、お寺で生れ育った坊主の倅らしく、坊主の倅として恥かしくない仕事のしかたをしたいと常に願い、日頃そうするよう努めているつもりである。私は法律の仕事をしてはいるが、仏飯で育ったものとしてその事に感謝し、精神的には坊主のつもりでいるし、坊主のつもりで弁護士の仕事をしている。

だから私は、坊主にはならなかったが、父が本音として持っていた、誰か坊主の後を継いでもらいたいと思っていた希望に形は違いますが応えていると思っているし、形こそ違いますが仏に仕えていると自負している。私は今後ますます坊主のような弁護士、坊主と間違えられるような弁護士になることを努めたいと思っている。

このように考えるようになった自分が、実は不思議である。というのは、子供の頃あれほど坊主になるのを嫌い、坊主の倅と言われるの

を嫌い、何かにつけて坊主の伴であることをひた隠しにしてきたからである。弁護士になってからは逆に、積極的に坊主の伴であることを公表しているしまつである。結局、年令のせいであろうか。このごろでは、未だ四歳にもならない一人息子に「坊主になれ」と言い、本当に坊主になってくれることを希望しているしまつである。やはり、私自身が坊主の伴であるからであらうか。(小杉法律事務所弁護士補)

余 暇

—私はこうして過している—

吉住 重造

(春日・中山)

余暇を広辞苑で引いてみると、あまった時間、ひまとなっているところ。が今ではそうしたとらえ方ではなく生きることにそのものを意味することがなってきたかと思う。すなわち新しい余暇への動きとして余暇を単に休息とか、レクリエーションとしてとらえるのではなく、自らの人生の生き方とのかかわりあいの中でとらえようとする動きである。

余暇は日常活動の中では三次活動にあたる部分である。一次活動は食事、睡眠などにあたる時間帯。二次活動が男子の職場における仕事、女子の育児家事などという。この三次活動の実態は一五歳〜二十四歳で最高を示し、働き盛りになるに従って減少する。そして高齢にな

ると増えていく。男女別では男子の方が三次活動のウェイトが多く、共働きの女子の余暇は極度にすくないのが特徴である。

この余暇を積極的活動と消極的活動に分けてみると、積極的活動はスポーツ、趣味、娯楽、勉強、奉仕的活動などで、消極的活動は交際、ラジオ、テレビ、読書、休養、くつろぎなどとなる。

これを私の日常活動に当てはめてみると、今も忙しく立ち働いている小商人の私には仕事と余暇をはっきり分けることはむづかしいが、私の場合まだまだ積極的活動の分野が多いのは心強く思っている。私には好奇心と飽きっぽさが同居しているらしく、この歳までいろいろな余暇活動をやってきたが三日坊主に終わったものが多い。それにいかにもうまく遊ぶかといった遊びの能力にも欠けているらしい。私はそれでよいと思っている。余暇の過ごし方を細かく規定し窮屈なものにするのではなく自分に合った好きなことを自由にすることが余暇の本質の本質だと考えているからだ。

ここでは今も続いているものの中から主なものを五つ選んで述べてみる。

1、ヨーガとリラクセーション

お茶の水女子大学教授渡辺俊男氏の提唱でリラククス運動をはじめたのが今から20年前、教授の体育生理学教室に通っているうち数人が発起人となり渡辺博士を会長として日本リラクセーション研究会を創立した。会員集めから会場探しまでいろいろやった。会長が講演し、私が横で実演するというケースが多かった。我々の日常生活は緊張の連続であり、日々のストレスから逃れることは不可能である。この頭と身体の極度の緊張を筋肉の力を抜くことによって取り除くことがり

ラックス法である。私のようなテンション人間には最適の健康法と心得ている。

ヨーガについてはノルウェー人のペールウィンター氏について基本的なポーズを習い、これを毎朝6時17分からのテレビ体操の時間に繰り込んで実行している。

2、散歩

毎日1万歩を心がけている。今日まで5時半起床、5千歩を5年間歩き続けてきた。散歩は足腰を鍛えるばかりでなく早起の空気を胸いつばいに吸い込んで気分爽快朝食もうまい。

まだ縁の残る散歩コースは四季それぞれの変化で目を楽しませてくれる。開発の急ピッチなコースではいろんなタイプの住宅が建ちはじめ、やがて完成し街全体の体裁を整えていく、こんな変化が楽しめるのも散歩の功用というところだ。

3、庭いじり

庭木、盆栽、寄せ植、箱庭、鯉の飼育などで休日にはとても部屋にジツとしてはいられない。特に小石、コケなどをあしらった薄鉢の寄せ植が得意であるが、昨年夏氷上へ墓参のために帰郷した12日間の留守中に水やりを頼んでおいた留守居が忘れていたため全滅してしまった。まだそのシヨックが完全に拭き取れたわけではないが、ポツポツはじめようと思っている。裏が50坪余り空いているので家庭菜園でもはじめようと畝作りをはじめている。

4、せともの蒐集

蒐集というより自然に集まったといったところで、壺をはじめ安物はばかりが、ところ狭しと置いてある。ガタタばかりで値打ちのある

金目のものはひとつもない。はじめは有田、伊万里などの色鮮かなものが好きだったが、今では淡いものに変ってきている。丹波立杭焼も何点か並んでいる。来客が部屋を見廻して「骨董品のご商売ですか」と聞かれて苦笑することがある。

5、読書

学令期以後変則的な学問しかできなかった私は、生涯勉強と心得ても寸暇を惜しんで手当たり次第本を読んでいる。

なかでも、私が特に興味をもっているのは人物論や自叙伝の類だ。古今東西の人物について1人でも多く知りたいと好んで買い求める。私が歴史上の人物の中で多大の関心をもち、非常に共感をおぼえている人物がある。それは石田治部少輔三成である。

昭和十一年の尾崎士郎の伝記小説「篝火」以来で今井林太郎、桑田忠親、司馬遼太郎など三成や関ヶ原戦記に関するものはほとんど読んだ。

明治維新は関ヶ原の後始末だといわれている。日本国内における古今最大の壮大な天下分け目の大合戦を指揮したこのたぐいまれな義士石田三成が、今日でもその行動や人物について依然として理解されていないのは甚だ遺憾に思っている。

これは徳川時代のご用学者によって書かれたものが、誹謗や故意にケチをつけることで、寄つてたかつて三成を悪者に仕上げて上げ、二百数十年の徳川幕府の安体を計つたものだろう。関ヶ原戦で秀吉恩顧の諸大名は自己の地位保全と一族の保身のため徳川方に走つたもので、その行動は現代日本の政党に於ける派閥工作や大福の総裁選挙の際の多数派工作に実によくにており、人間は何百年経ってもちっとも変ら

ないものだとつくづく思う。

話が横道にそれたが、最近読んだものの中では少し古いが司馬遼太郎対談集「日本人を考える」が興味深かった。

(ノーブルスター(株)社長)

ひとり残されて

藤尾 ちゑ子

(西 脇)

もう十年以上になりますが、四人の子供達もそれぞれ一家を持って巣立ってゆきました。残った老夫婦二人は『いつまでも健康で幸せに!』と願いつつ、休日を利用しては一、二泊の旅行に出て楽しんでました。

昨年の九月主人は『肺活量は三十歳ぐらいですよ』と医師からいわれて喜んだものでした。

ところがまれに見る暑い夏のせい、疲れが出たのか、入院しました。が二十日足らずの入院生活のところ『病状急変』に知らせを受けて急いで駆けつけた時には息絶えておりました。

『完全看護』の規定になっているが、こんなに早く逝ってしまうのだしたら『無理に頼んでも泊めて貰えばよかったのに』と悔んでも及びませんでした。

何といっても夫婦として五十余年、思い出は尽きません。葬儀の緊

張がとれたとき、胸の中に大きな空洞が出来た思いで、涙の種はつきません。

生前の日常は、なんでも私を呼んでいた明治生れの夫は、どんなに不自由をして淋しがっていることかと思ったり、しかし不思議にも生前の悪い癖はちっとも思い出せず、いい事ばかりが浮んで来て涙をさそいます。

隣家に住んでいる娘から『九年前に手術のため入院の時は、泊り込みで長い間看護して貰って、思う存分したい事をして、人生を楽しみ、八十余の今日まで活躍したあと、何の苦痛もなく、若い大勢に見守られて旅立った父ですよ。素晴らしい人生だったのよ』

と慰められて、今では考え直して、この世にいない人とは思わずに一人住いのまま、読み残しの本を読んだり、自分の趣味に没頭したりで、やっと余生を楽しめる余裕を持つようになりました。

長男夫婦からも『明石は気候もいいし、一諸に暮したら?』とすすめてくれるし、嫁たちもみないい人柄に恵まれています。『元氣なうちは独りの方が自由で双方氣を使わずにすむから』と氣ままな生活を続けております。

やがて亡夫の一周忌が参りますが、関西の息子たちが一切手配してくれて、一ヶ月早く法要を済ませました。これで納骨、お盆と三回お墓参りをして一段落の満された氣持になりました。

思えば会社づとめの時、私立大学から教授の要請を受けましたとき、もう七十近い年故『家でゆつくりやったら』とすすめましたが、性来、氣の若い元氣な質なので、

『週に二、三日若い学生と講義や実験で時間を費やすのは楽しみだ

よ」と六十八歳になったとき、会社をやめて私大に参ったのですが、青春をとり戻した風で、孫のような若い学生と意気投合して楽しそうでした。

もうすぐお正月が来ます。亡夫の生前は、学生や卒業生が年始に來て賑やかなお正月でしたが、来年は関西の息子が迎えに來てくれますので、例年のようなあわただしさはありません。亡夫からは『俺だけが留守番させられるのか』と不服をいわれるような気がしますので、戒名を紙に書いて、ハンドバックに入れて同行しようと思っています。

(五四・十二・五)

日中鍼灸術くらべ

杏林堂院長 小川 晴通

(山南・山本)

聾啞治療のめざましい進歩

鍼というとすぐ痛いというイメージが浮かぶ人がまだ沢山いらつしやる。が、一度でも治療を受けた人はおわかりのように、鍼は決して痛いものではない。鍼の鎮痛効果、内臓疾患への卓効は、すでに高く評価されているし、ノイローゼ、自律神経失調症など、心の病いにも多大な成果をあげてきている。近頃西洋医学でよく問題にされる「副作用」がまったくないというのも、大きな特徴だろう。

鍼灸を業とする者にとつて、日本における鍼灸の地位の向上は嬉しい限りである。と同時に、この道一筋に四〇年歩んできた私は、年とともに、鍼の故郷中国をぜひ訪れたいという願いを持つようになった。

文革以後中国は、諸外国と国交を回復したり文化交流を行なったりして、世界の注目を集めてきたが、とりわけ「鍼麻酔」による手術のニュースは私たち鍼灸師を驚かせるに充分だった。さらに、鍼の威力は近視、難聴、聾啞にも効力を發揮すると聞き、このような中華医学会のめざましい発展ぶりを見ると、さっそく「日中友好鍼灸活動家訪中団」が結成されたのである。

一九七五年十二月、団長の私のもと二十一名は、上海から濟南、天津、北京を一日間かけて廻った。それからもう四年近い歳月がたっているが、現状はそうは変わってはいまい。滞在中は病院、人民公社、工場、施設、学校など盛り沢山に見学したが、要人はもとより生徒や幼い園児に至るまで我々に示してくれた温かい歓迎は、筆舌に尽くし難く、団員一同、感激したものであった。

病院の参観中、特に聾啞の治療の成功には驚いた。上海市には九つの聾啞学校があり、我々が見学した南市区にある「上海聾啞学校」は生徒数一九二名、教職員二十二名。八年の修学で、治療は無料である。文革前はおろそかにされていた聾啞者教育だが、開放後、見事に改革され、大多数の子供たちが歌い話せるようになったという。四〇名くらいの小学生がいる教室では、鍼治療とともに発声訓練に力を入れている。興味深かったのは、舌の体操を何十回となくやっていることだ。治療の時間が三なら訓練は五といったところだろうか。

これについては以前、日本でも難聴のグループを作つて中国の鍼の



山東省で女生徒からハリの試刺を受ける筆者

技術を取り入れたことがある。しかし治療としては完璧であったはずなのに、その時は中国のような効果が余り出なかった。その理由が聾啞学校を訪問して初めてわかったのである。鍼のツボを日本へ持ち帰って治療するだけではダメなのだ、耳にも耳の運動が必要だと。これでは耳の鍼の効果が無いはずだと痛切に感じたのだ。

日本と中国の鍼灸術の違いを見ると、中国のそれは、脅威的な成功をとげた鍼麻酔のみならず、鍼の真価を科学的に究明できるシステムにある。それは後述する中西合作（中国医学と西洋医学の交流）のたまものであり、鍼の治療技術が「対症療法」として進んでいることを

指す。つまり現在の中国では、古典にあるような「体の変化を通して悪いところを治す」という方法ではなく、現代医学的な一つの症状から治療法を見つけるといふやり方なのだ。

これに対して日本では、中国の古典に導かれた「随症療法」が今も生きている。我々が行なうのは、人間の持つ十二の経絡（体の流れ）をもとに脈を見て、どの経絡が

悪い、どの経絡をどのように補う、どの経絡を瀉（はら）していく——という根本的な治療であって、肩が痛いなら肩だけ鍼を打つという中国の治療法とはまったく違う。

聾啞学校見学の後、学校側との質疑応答の場で私は一つ提案した。それは手の小腸経が聾啞の発声に関係があるということだ。これは古典によるもので、まさに「随症療法」の発想だが、実は私には次のようなエピソードがあるのである。

戦後間もない頃、歌舞伎の「吃又」が十八番の役者がいた。吃又とは吃りの男の話ことで、役者は練習を積んで吃りのマネをする。そのうち肘が痛むようになったので私が治療したところ、その経絡をすっかり治したものだから、痛みはとれたが、今度は吃れなくなってしまうのである。この経験を自宅近くの聾啞学校の先生に教えたら、肘をもみながら発声訓練をすると、たちどころに効果が現われたということであった。

中国側にこの話を伝えると、先方は大変興味を示してくれた。中国でもこれからは古書の持つ伝統的な治療法を重要視して行くとのこと。それだけに古書に対する討論は盛んに行なわれているようだった。

出血が少ない鍼麻酔の手術

鍼麻酔による手術は各地でそれぞれ見学させてもらったが、ここでは上海市竜華医院で行なわれた胃潰瘍の手術のことをお話ししよう。

この病院はベッド数二五〇、内科・外科・鍼灸科・婦人科・耳鼻科があり、一日の外来患者数は二〇〇〇名を数えるという。手術を受ける患者は四三歳の男性だった。左右の足に三本の鍼を打ち、二六分後

に執刀に入る。執刀医を含めて立会医は六名、そのうち一名は手で鍼刺激を続けている。酸素ボンベが一本手術室内の隅に立ててあるが、酸素マスクの用意なし（必要ないということ）。

手術は非常に手際よく行なわれ、大きな拳の二個分ほどの潰瘍が摘出された。手術後の患者は元気で顔色もよく、寝台の上に上体を起こして「ニイハオ」との挨拶があり、みずから拍手をして我々を歓迎してくれた。我々は二階のガラス部屋より手術室を遠見していたが、手術室に入ることを許可され患者さんと握手する。大手術の後とは思えない明るい雰囲気だった。

他の病院では甲状腺の手術、肺の一部切除などを見学したが、いずれも白衣を着せてもらって手術室に立ち入ることを許される。我々は土足で、カメラなども持ち込むのだが、彼らは一際無頓着。そういうところは本当に素朴である。手術室も学校の教室のような感じ、余りきれいではないように見受けられた。

手術風景で特徴的なことは、手術室では看護婦も執刀医も立場が同等で、一見して区別がつかない点である（日本とは大違い）。中国では、重要なことは、病人が一人いるとその人を主体に治療法を考えるということだ。ここでは西洋医学も中国医学も対等の立場にある。そしてその人のためなら、医者の手間が三倍四倍かかっても構わないという思想が徹底しているのである。

現在、中国では鍼麻酔の成功率は九〇パーセントと言われている。都市だけでなく、農村などでも多く採用されており、手・足・腹部・胸部どの部位でも可能だ。鍼麻酔がこのように浸透した理由は①簡単、②安全、③費用が安い、④鎮痛の効果が高い、⑤出血が少ない、

などによるところが大きい。ただ、手術中にも患者の内臓は動いているわけで、内臓をひっぱるときに患者に不快感を与える場合があり問題であるということだった。日本でも一時行なわれていたこの鍼麻酔を採用した手術が、現在著しく減ってしまったのはそのためで、また、内臓が動く手術がやりにくいというのも敬遠されるようになった理由である。

よく言われるが、日本人だから鍼麻酔がかかりにくいということはまったくないと私は確信している。毛主席への忠誠心が効果を高めているとか、手術前に麻酔薬を飲ませるのではないとか、いろいろ日本では疑いを持たれていたが、そのような中国側の報告はなかった。

彼らの好意に感謝したいのは、どこの病院へ行っても、わざわざ「この患者は何年前の事故でこの指を切った。それを拾ってきてつないだ結果、このように完治した」と隠さず解説してくれることである。

また、天津にある有名な接骨病院・天津医院では、二日かかってリヤカーで運んできたという病人に会ったが、医師が言うには「この患者は昨日病院に着いたのだが、今日あなた方が来るから痛むのをそのままにしておきました」とのこと。これには一同ビクリするやら、恐縮するやら……。三十一歳の男の患者はそれまでまったく腰が動かなかったのに、その場でアッという間に動くようになってしまった。

お返しに、というわけでもないが、私も中国人に鍼をしてあげたことがある。確か済南の宿舍だったと思う。一日の行程を終了して引き上げてきたあと随行員と雑談していると、彼らが「実は風邪を引いています」「腰が痛い」と言う。「よし、やってあげましょう」と持参した鍼道具を出して、団員たちの前で治療してあげたのだ。彼らは日本

の鍼の細さにたいそう驚いていたようだったが、皆「大変素晴らしい」と喜んでくれた。

ところで、中国と日本の鍼の太さは随分違うようだ。例えば日本でも、都会と農村で、また時代においても違う。私なども戦前はかなり太い鍼を使ったように記憶しているが、中国のものはもっと太かった。これは食べ物とか体力に緊密な関係があるわけで、労働者ほど鍼は太く、都会の人ほど細くなる。中国人は概して筋肉質タイプと言えらるだろう。朝早く太極拳の練習をしている彼らの姿を見ると、筋肉質が多いのもなるほどとうなずける。

今回の私の浅い見聞を総合して考えてみると、我々が訪れた中国の人民八億のうち八割は農村に住んでおり、反動派の支配当時その農民たちは抑圧と搾取のもとにあつて医療・衛生の面はお話にならないほど貧しかったようだ。農民は病気になるでも治療を受ける場所すらなく、重病患者は死を待つばかりだった。

中国のハリ麻酔による手術

一九四九年新中国成立後も劉少奇一派の西洋医学尊重一辺倒で、重点は都市におかれ、農村における医療事業の発展は少しも進まなかったのだが、文革が始まって以来この点が鋭く批判され、毛主席の「すべての医療衛生活動を農村に置く」という指示のもとに、幾

つかの大病院が奥地の省に移り、また都市の医師が農村の巡回医療に出かけ、農村の医療衛生条件は急速に改められたという。同時に文革後は中国医学の価値を高く評価して漢方医学が躍進しており、中国医学と西洋医学との結合（中西合作）が行われるようになっていく。

中医学院は近代の中医を出し、一方、西洋医学を専攻した医師も中医を学んでいる。原則として診断技術は西洋医的に、治療行為は中西合作で行ない、治療効果の判定も中西両方で検討しているようである。中国医療を一言でいうとすれば、人民の健康がすべてに優先するという政策が基本となっているということか。

大都市には大病院があり、農村人民公社には医療センターが、また末端の作業所ごとに簡易診療室があり、文革前はいなかった「はだしの医者」（赤脚医という。大隊ごとに三〜五名養成されており、貧農・下層の農民の中から選出された人間が衛生院で毎年一ヵ月訓練を受ける）が担当する。このシステムなら、例えば慢性リウマチの患者は赤脚医によって鍼の治療が受けられ、足などを骨折・切斷した者は赤脚医から衛生院へ、さらに病院へと送られ、適切な処置が敏速に与えられるわけである。各地の病院で多くの医師たちと対談したが、西洋医も中医とともに古典を勉強しようという意欲に溢れていたのには感心させられた。

日本もこれからは中西合作の医学を学んでいかななくてはなるまい。私の治療院でも内科・外科・眼科等の中に現代医学と協調しながら鍼治療の完成を目指している。中国ではいづれ西医、中医の別がなくなるであらう。日本にもその日が訪れることを願ってやまない。

（月刊「旅」より転載。東京都鍼灸師会々長、旧姓難波晴）

夢追い猿 奮闘記

渡辺 隆男

(氷上・朝阪)

台北の故宮博物院

日支事変前夜の昭和八年、いち早く戦乱の危機を察した時の中国政府は、北京の故宮博物院に秘蔵する龐大な美術品の移動を計画した。

北京の故宮博物院とは、清朝時代の宮殿、紫禁城を博物館としたもので、当時そこに収蔵された美術品は、書、画、陶磁器、玉器、銅器、漆器、文房具、その他いづれも中国歴代芸術の粋を擁し、その数は二十数万点にものぼった。古くは千年を経て中国内府に伝来した美術品も多かったが、清の乾隆皇帝が美術への造詣ことのほか深く、その権力と財とを駆使してさらに大規模な蒐集を行ない、市井に潜在する名品を悉く集め去ったのであった。一国の美術品を収めた美術館としては、質、量ともに世界随一の存在である。

当時の北京故宮博物院では、運搬のための完全な包装を研究、紫禁城の楼上から落下テストまでくり返して道中の安全を確認した後、数千個の箱詰めとし、海路は軍艦二隻に分載、陸路は牛馬貨車、列をなして転々重慶に運んだ。重慶は日中戦争最後の砦であったが、戦後はまた内乱止まず、共産軍の攻撃をされて再び海路台湾の台中に運び、

同時に国民党の二百万人もまた台湾に大移動を敢行した。その後、ようやく政局の安定をみた昭和三十

五年、蔣介石總統の指示で台北郊外の山裾に、北京の紫禁城を模した豪華な故宮博物院を建造して収容、はじめてその美術品を公開展示することとなった。

かくして台北の故宮は、観光客

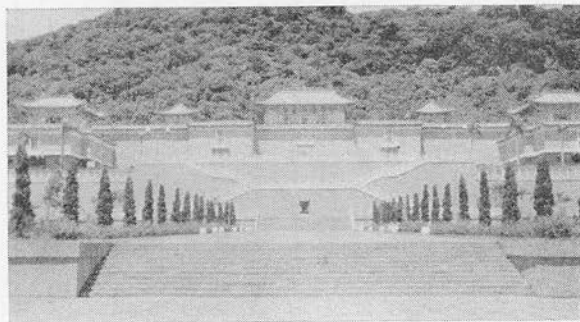
の必ず訪れる名所となった。年に四度の陳列がえを行なっても、収蔵する二十万点を展示し終えるには三十年の歳月を要するという。

中国伝来の秘宝は、今なお台北の故宮にあつて、北京の故宮にはない。今、北京の故宮に陳列している美術品は、その後各所から集めたものにすぎない。

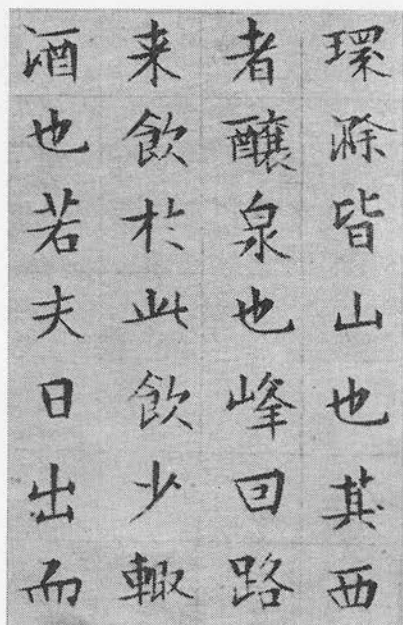
中国書画の名作に感動

私はかねてより、故宮コレクションの動静を聞き、とくに書画の名作について深い関心を抱いていた。私の出版社は、東洋の伝統芸術にかかわり、なかでも中国書道の出版を中心としていたからである。

私がはじめて台北の故宮博物院を訪ねたのは、十余年前、開館後間



台北の故宮博物院



明・文徵明醉翁亭記（部分・原寸）

もない頃のことであった。今もってそのときの強烈な印象を忘れることができない。古来書聖と謳われる晋・王羲之の手紙、良寛も心酔したという唐・懷素の真筆、草書の規範と仰がれる唐・孫過庭の書譜、等々、名だたる劇跡を前にして目のウロコのはがれ落ちる思いであったが、なかでも息をのんだのは、明代の名家、文徵明が八十二歳の細楷『醉翁亭記』（写真）であった。文徵明は若くから書画ともに冠絶した名家であるが、最晩年のこの一作が生涯の最高傑作といわれる。その一分の隙もくもらない造形、恐ろしいまでに澄みきった精気は、歳八十を越えてこそはじめて可能なわざであったにちがいない。また私の足を釘付けにしたのは、画面が二メートルを超える大幅、北宋・范寛の名作『谿山行旅図』（本誌7号掲載）である。その豪放な構図が打ち出す大自然の神気、強靱な筆触の奏でる筆者の生氣は、

千年後の今にも、音をなして見る者を蹂躪することくであった。その他、名品中の名品、古来神品と謳われる中国の名作は、それぞれ各様に、人を陶酔に魅くような魔力を秘めているのか、見るたびにさらに深く心をとりえて、その妙境はもはや筆舌につくしがたい。

私は南无柄、西洋の美術館もよく歩き、ミケランジェロやダヴィンチ、ミレー……等々の名作にも数多く接したが、その深さにおいて中国の名作には比すべくもない。西洋絵画が『静』であれば、中国絵画はまさに『動』である。以来、私は足繁く故宮に通うこととなった。

その後、今から五年前のことである。氷上郷友会の会合で知り合った常岡幹彦画伯に、故宮絵画の印象を語って意気投合し、彼を故宮にさそった。（本誌7号に報告）彼はさすがに専門画家の目をもっていった。例えば前述の范寛の名作を、私はすでに五回も見ていたのだが、彼はただの一回で、私の何倍もの感動を受けたのである。彼の感動を見た私もまた感激を新たにした。そしてこのとき、私のある策謀は、いよいよその確信を深めたのである。

夢に懸った友情のきづな

故宮の書画に魅せられた私には、当然のことながら出版屋の商魂がうずきはじめていた。人類悠久の文明に育まれて、その節々に昇華した希世の名作は、二度と生まれることがない。美術は時間と国境とを越えて万人の親しく享受すべき、先賢の大いなる精神的遺産である。出版人の使命ここにあり！というわけである。だが、思想や文学と異り、書画のような視覚芸術は、その真価を活字本や図録の類いで伝えるのは至難のわざである。常岡氏や私の受けた感動は、真筆その

ものにしか存在しない。もしその生気や迫力をそのままに伝えようとするならば、その方法はただ一つ、真筆と瓜二つの、材質も色彩も寸法も完全に一致した複製をつくる以外にない。私の夢想はいよいよこのり、遂には動かしがたいものとなつていった。

完璧な複製ができれば、その複製品は真筆と同じ価値をもつ。従来の複製技術では及ばないが、現代印刷技術の粋を集め、試作研究を積み重ねていくはずだと、関係者の説得にかかった。またまた大風呂敷か、道楽もいいかげんにしろ」などと、きびしい声もあったが、幸い私の会社では数年来、複製の経験があつたし、そのあたりは丹波育ちの負けずぎらいとねばりとで押し切つた。だが、問題は印刷技術である。そもそも出版社というのは印刷所をもたない。立案、企画、原稿依頼、取材編集をして、製版、印刷、製本の工程はすべて外注、出来上つた本は宣伝する一方、取次店、書店に販売も委託する。

ところで、印刷には強力な味方があつた。丹波・古市出身の下中弥三郎氏が創立した東京印書館である。下中氏は戦前に出版社の平凡社をつくり、戦後に印刷社の東京印書館を別会社としてつくれた。二社とも斯界の大御所である。弥三郎氏は十余年前に他界し、平凡社は三男の邦彦氏、東京印書館は次男の直也氏が社長である。出版社と印刷所との関係は深い。以前、ある恩師に「君も丹波の出なら印書館とつきあつたらどうか」といわれ、その後私の社は雑誌や美術書の印刷の大半を依頼するようになり、気心知れた関係にあつた。ちなみに、本誌「山ざる」の表紙も第5号以降は東京印書館の印刷である。

東京印書館の下中現社長も、丹波の血を引いてか進取の気性に富み、近年西独で開発された世界で最も高性能の色分解製版機を導入

し、優秀な技術者も揃えていた。私はその機械と技術者とに目をつけ、故宮書画複製の共同開発を申し入れたところ、下中氏は印刷名利につぎる仕事だ、と快諾、直ちにプロジェクトチームを編成した。

話は前後するが、故宮博物院との交渉にはほぼ三年を費した。故宮は中華民国政府の管理下にあり、所蔵の美術品には門外不出の掟がある。かつて朝日新聞社が岸信介総理を介して日本での大展示会を依頼したが実現しなかったし、アメリカもヨーロッパ諸国も強くそれを望んだが、故宮の掟をまげることではできなかった。私の夢想も高嶺の花に等しく、関係者みな異口同音に不可能と断言した。

私は生来ロマンチストを自負して、この性分もまた丹波の風土に起因するものと確信している。たとえ五年が十年かかってよい、夢は消え失せぬ限り追うべし、と心にきめた。人脈をたどってしきりに台北を訪ね、盃を上げては心底を吐露した。そして二人の知己を得た。K氏とC氏とである。K氏は戦前日本の大学を出た親日家、C氏は中国画の大家である。以心伝心、友情のきづなは故宮人脈の根幹に迫り、架空の夢は現実となった。故宮には十七名の理事があり、いずれも名だたる元老である。いつしか根廻しが効を奏し、一理事の介添で遂に故宮の蔣院長と会食の機会を得たのである。

「名作の真筆はこの世に一枚しか存在しないが、私は何千枚もの真筆をつくって広く世界に伝えたい」といい、東京印書館の技術も示し、両社とも利潤を超越して取り組むと誓った。「よろしい、申請書を出し給え、理事会にはかつてみよう」まさに鶴の一声であった。かくして故宮書画の名作三十余点の複製許可が出たのである。しかもわが二支社と故宮博物院との「合作出版」となった。契約書には院長と

私の署名に加えて、東京印書館の下中氏も立合人として署名した。

またそのとき、この朗報を知った常岡画伯に加えて、郷友会の大先輩、松山幸逸氏まで訪台し、祝盃を重ねてはしきりに力づけていたものだ。郷友の情、また忘れぬ思い出である。

同業者のなかには、ピーナツを使つたんだろう、とかんぐる輩もいたが、どっこい、そこは丹波の山家氣質が心意気、夢まで届いた友情のきづな、徹頭徹尾、正攻法が効を奏したのであった。

複製新技術の開発に奔走

わがプロジェクト・チームは、早速とてつもない大カメラを設計・発注した。長さ五メートル、幅、高さ各二メートル、重量一トン、全自動式である。二メートルの被写体画面をバキュームで吸いつけ、新聞紙大のフィルムに撮影する。カメラは大日本スクリーン社がつくり、カラーフィルムはコダック社から空輸、それらを船で台北に送り、故宮の一室に据えつけるまでに八ヵ月、撮影には六十七名が渡航し、一ヵ月がかりで二千枚のフィルムを使った。昭和五十二年晩秋のこと、巨大なカメラに故宮の関係者がたまげたのはいうまでもない。

撮影は成功したものの、難題は山積していた。印書館の製版技師など、陶工柿右衛門が、柿の色が出ないために焼き上った陶器を割りつづけるという、あの物語りをまさに地でゆく精進ぶりであった。数百年、千年を経た古色や質感を印刷で再現するのは容易なわざではない。八色ないし十二色に分解した刷版をそれぞれ微妙に調正し、ようやく出来上ったテスト刷りを持って台北に赴き、真筆と見比べながら緻密なチェックをして帰国、また一から再出発、それを何度もくり返

して、真筆に一步一步近づけていくわけである。

真筆は紙または絹布に書かれているが、その素材も再現しなければならぬ。網はまだしも、紙の開発は難儀である。試験用でも最低何トンかを抄かなければならない。失敗したらみなオシヤカである。また印刷機は精度を高めようとするればするほど堅くて分厚い紙を要求するが、真筆は粗くて柔軟な紙質であり、その上表具には極めて薄い紙でなければならぬ。すべての条件が反対なのである。

撮影後二年間、各技術者を動員し、衆智を集めて上記の難問題を悉く解決した。また掛軸や巻物に仕立てる表具については、日本の表具師はいずれも職人かたぎで頭が固く、中国式表具ができない上、べらぼうに高いことをいうので、台北に表具工場をつくった。

昨秋ようやく完成した見本を故宮の院長に見せたときのことである。院長はしばし熟視の末に「これはうちの倉から出した真跡だ！私が見たいのは二玄社がつくった複製の方だ！」と。泣ける話である。

その後、フランクフルトや香港で一部の完成見本を展示、宣伝を開始したが、海外の反響も大きい。印刷の専門家まで、恐るべき複製だという。五年の歳月と数億円の投資を余儀なくされたが、郷友諸兄、他事ながら御放念あれ。どうか元だけは取り返せるほどの予約が集まって、今春販売を開始した。

どうやら「道楽」の汚名は返上できそうである。

丹波、山家の猿が、花のお江戸で突っ張っているさまを、松山竹水氏の命により、恥かしながら記した次第である。

(二玄社々長)

科学技術についての思い出

八〇年代のエネルギー時代を迎えて

有田 喜一

(氷上・谷村)

役人時代に於ける科学技術の必要性の 体得と戦後の科学技術振興運動

私は科学者でも技術者でもないが大学を出て、通信省に就職しようが大蔵省にしようかと大変迷って、郷里の大先輩、田健治郎先生の門を叩いて御指導を受けた。田先生は「有田君、牛尾たるよりも鶏頭たれ」という言葉があるだろう。大蔵省は予算を握っているから、各省の人が頭を下げて来るので優越感を抱き自然と秀才が集って来る。そんな処で後の方からついて行くより通信省の方がいいではないか。世間では通信省は郵便屋の親方に思っているけれど通信の外に海運・電力・航空・電波等日本の将来を左右する大事な行政を持っている。人が余り気付かない間に入って、将来を牛耳る方が利口だよ、そうして科学者、技術者を立派に育成して、これをうまく活用することが大事だ」と諭されて通信省に入ったのである。それから通信省や運輸省（戦時中行政改革に依り運輸省が創設され、通信省の大半の行政が移った）で諸般の行政に当たったがその裏には常に技術の力を借りなければならぬことを体得した。日本が大太平洋戦争で敗けた原因は色々あ

るだろうが、やはり科学技術の遅れが大きな原因だったと痛感した。やれ竹槍だ、やれ体当たりだといって精神力は旺盛であったが科学技術の力にはついに歯が立たなかった。日本の潜水艦は我が海軍の強みとして世界に誇っていたが、リーダー技術の遅れで序戦でベチャンコにやられてしまった。やはり科学の力にはかなわない。

私は戦後政界に出て、静かにいろんな面を観察していたのだが戦災直後は焼けた工場と焼け残った工場とは雲泥の差であった。しかし数年経って見ると焼けた方は新しい機械を入れて死に者狂いでやっている。焼けなかった方は古い機械をそのまま使っているのんびりとしている。暫くしているうちに焼けた方が繁栄して来てあべこべになっている。私はこの現実を観て、禍い転じて福となすということがあるが敗戦に依って焦土と化した我が日本を、戦後の科学技術の世界的大変革の波にうまく乗せるか否かに依って、我が国今後の運命が決まってくると判断した。そうして政、官、財一致協力して科学技術振興に関する一大国民運動を展開した。幸いにしてこの運動に共鳴してくれる有力者も多数あって、ついに国会には科学技術振興特別委員会が設置せられ、政府には国務大臣を長官とする科学技術庁という役所も出来た。

初代科学技術振興委員長就任と原子力

私は初代の科学技術振興特別委員長に選ばれた。科学技術庁の初代長官は正力松太郎さん（故人）であった。科学技術委員長として第一に為すべき仕事は原子力基本法を作ることであった。当時一般国民は原子力というところの原爆を想起して、恐ろしいものという先入感があ

るし又野党は政府の提案には原則として反対するのが建前だ。そこで私としてはこれを成立せしむには超党派でいかねばならぬと考え、原子力に理解のある社会党の松前重義君や、三宅正一君等と相談して、議員立法で進めることにした。このことが旨く成功して東海村に原子力研究所が出来て、原子力発電所が各所に開発されて来た。昭和三十一年私は原子力調査団長として同僚議員六名自民党の（斎藤憲三君、前田正男君、白川一雄君（参））社会党の松前重義君、志村茂治君、海野三郎君（参議院議員）や東電、関電の専門家と共に渡米した。マッケーベさんの案内に依り各地を視察したが感銘したことが二つあった。その一つはアメリカはエネルギー資源が相当豊富であるにもかかわらず、将来のことを考えて開拓精神に燃えて原子力開発に熱心に取組んでいたことであつた。その二は研究費が相当多額に認められているにかかわらず共同して無駄なく研究を進めていること、殊に十数個所の大学が一緒になって、老若の差別なく名もなき若い一学徒の意見にも老大家が熱心に耳を傾け、新しいものはどしどし取入れて行くという態度で共同研究が大変盛んに進んでいた。我が国として大いに反省すべきことだと痛感した。

—— 科学技術庁長官に就任して感じたこと ——

昭和四十一年、私は文部大臣の時、科学技術庁長官を兼任したのであるが、その頃の科学技術関係の予算は随分増加して居たが、それでも民間の研究費を合わせて年額五千億圓に満たない状況であつた。しかもその内、政府の支出は僅か二七％に過ぎなかつた。アメリカの研究費十一兆億圓、そのうち政府の支出半分以上を占めて居る実状には

比べものにもならない。我が国の研究費がこんなに少ないのは大蔵省の考え方が国民の血税だから無駄使いは出来ない、実現の可能性あるものばかりに予算をつけて、成功するかしないか分らないいわゆる「夢」の研究には予算を附けないからだと思ふ。国防研究費の少い我が国としては、やはり真科学技術振興のためには夢の研究を認めることが百年の大計ではあるまいか。

科学技術の研究費が少ない上に、我が国民性が島国根性的で共同研究をやらないことにも大きく反省すべき余地がある。派閥は政界ばかりでなく、いずれの世界にもあるが、学閥にも相当根強いものがある。研究費が少いの、それが各大学、まちまちの研究を進め、共同研究をやらないため、研究の重複があつて研究費の無駄使いが生じて来る。個人の能力だけでやれる数学とか物理は我が国は世界的に優れているが総合技術になるとそうは行かない。大いに反省すべきことだと思ふ。

次に科学技術者に対する処遇の改善も科学技術の振興の必要要件である。科学技術者も家庭を持つ以上子供の教育、その他何かと生計費が嵩張つて来る。ところが役所は部長とか所長、局長といったような役付にならないと給料が上らない。ところが役付になるとどうしても人事とか予算などの俗務に頭を使わざるを得なくなり、せっかく今迄やって来た研究を中絶せざるを得なくなることが多い。やはり研究家は研究一筋にやっていって生活の安定も地位の向上も得られるような優遇措置が講じられる制度を作ることが必要と思ふ。我が国の科学技術は相当進んで来たがそれは物真似技術でここ迄来たのだ。物真似では追いつけ／＼と近よることは出来るが追越すことは出来ないであらう。

う。殊に資源に恵まれない我が国だ、それを補うだけの科学技術の独自性を發揮して、もつともつと振興しなければ追越すことはもとより追いついて行くことさえ困難となるであらう。もう一つ切望したいことは「ごね得運動の排除」である。原子力発電所の開発にしても、原子力船むつの問題にしても、ごねて反対さえしていれば莫大な補償金が得られるというごね得が横行し過ぎてゐる。こんなことではせっかく一生懸命に研究開発をやっても何んにもならないという結果を招来する。こういった風潮は一日も早く根絶すべきだと思ふ。

——省エネルギー研究とエネルギー消費規制——

エネルギー資源の少ない我が国としてはもつともつと早くから省エネルギー技術の研究をしっかりとやっておくべきであつた。この技術が進んでいけば一割位の節約は簡単に出来るはずである。今からでも遅くはない。積極的に省エネルギー技術の推進を図るべきであると同時に日本の産業構造の変革をやらねばならない。石油が安くて充分あつた時代に出来た今の産業構造から石油が高くて不足する時代への産業構造の転換をやつていかなければならないことは当然のことだが、と同時に一方消費規制も徹底してやるのが肝要である。私は戦時中徹底した電力の消費規制を断行したことがあるが、国民にもつともつとエネルギーに対する認識を深めて貰つて徹底したエネルギーの消費節約と規制をしていかなければならないと思ふ。

例えば農山村には裏山に行けば柴や枯れ枝など薪が一杯ある。にもかかわらず平気でプロパンガスを使つてゐる。生活の便利さはあるがエネルギーに乏しい我が国としては薪を使うように奨励したらいいか

かと思ふ。

——代替エネルギーの開発研究と石油の備蓄の改善——

次に積極的に考えなくてはならないことは代替エネルギーのことである。先に述べたように産業構造も変えなくてはならないが、いくら変えても、文化の向上と経済の進展からみて、エネルギーは当然必要なのだから、従来の石油エネルギーに代えて安全性を確保しながら原子力開発をもつと／＼積極的に進め、高速増殖炉の具現化と核融合の開発を急ぐべきである。又石炭の液化や地熱発電、太陽熱の利用、風力、潮力の利用による発電。そういう代替エネルギーに積極的に取り組んでいく必要がある。さらにもう一つ大事なことは石油の備蓄のことである。その備蓄量の増加を図ることの必要なことはいうまでもないが、同時にタンクが乱立したり、タンカーを繋留しておく現在の備蓄方法の改善である。日本は平和国家だといつていかに平和を守ろうとしても相手が侵略してくれば一体どうなるのか。地上にむき出しのタンクの上に爆弾を投げられたらどうなるのか。せつかく備蓄やるのなら非常時を考えて地下備蓄に力を入れるべきだと思ふ。

(元国務大臣・本会名誉会長)

☆

☆

☆

建築と歴史

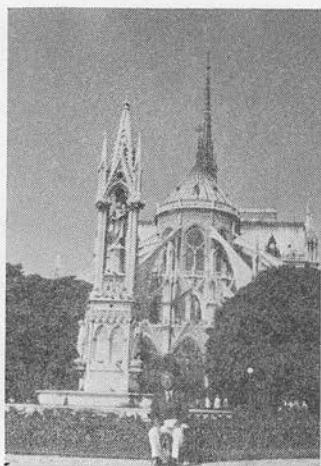
伴 仲 信 次

(春日・多利)

ノートルダム

NHKの今年度の大河ドラマ「獅子の時代」にチョンマゲとフロックコートの日本人が、パリセーヌ河畔のノートルダム寺院を背景に写し出されてくる。

この寺院は(教会と言うべきか)まことに繊細華麗で芸術性も高



ノートルダム寺院と筆者

く、又構造的にも合理的に構築され宗教建築として屈指の名建築である。建坪約二〇〇〇坪高さは丸ビルより高く九〇〇〇人を収容出来る大聖堂である。ところがこの建築は一二五〇年頃

の完成であるから我が国では鎌倉時代で源平の戦いはなやかなりし頃に建ったものときくと、これ又驚きである。

われ／＼は古いことをチョンマゲ時代などと言う。古風というか未開発というかいかにも古臭さを揶揄した言葉になるが、源平時代というところから古い印象をうける。その時代にあの立派な石造ゴシック建築が完成していた事にただ／＼驚き入る次第である。昨年エーゲ海の旅行に参加してさらに驚いた。

エーゲ海

エーゲ海クルーズはギリシャのアテネを基点とした、豪華客船で紺碧のエーゲ海に浮ぶミノス島、ロードス島、クレタ島、サントリーニ島など四泊五日の船旅であったが、我が国の佐渡や淡路、或いはそれ以下の大きさながらそこに残された文化遺跡はまさに目を見張るものがあつた。

例えばクレタ島クノッソスには、先史時代の海の支配者ミノスの栄えた時代(紀元前二〇〇〇年)ミノア文化の最盛期に建てられたミノスの宮殿跡がある。七〇〇〇坪あると言われる石造建築の廃墟を目の前にした時の驚きは、とても下手な文章では表現出来ない。

四〇〇〇年もの昔にあの大きな石材を伐り出し、運搬し、加工して積み上げて建築した技術、さらにそれに要した道具、工具、職人を想像し、又残された彫刻、絵画を見て先人の偉業にただ驚き入った次第である。これは我が国の新石器時代か縄文期の古代に属するものであり、当時の日本人の生活等は神話的?にボヤけて住生活一つをみても想像の世界を思いえがくにとどまるが、彼の地では何千年を風雨に晒



されながらも遺構として立派に現存することは誠に羨ましい限りであった。

アクロポリス

学生時代に西洋建築史で学んだ憧れのアクロポリスやパルテノンも見学したが、紀元前五世紀の頃に何百万トンとも知れぬ大量の大理石を一五〇メートルの山の上に運びあげ、彫刻、加工して積み上

げて建てられた当時の建築家や職人、更にこれを企画したのであろう大政治家（あるいは王様？）には心から頭の下る思いであった。

一六四〇年にこの神殿に格所したトルコ軍の火薬の爆発により大破して今日の姿になったと説明されたが、今も昔も変らぬ戦争の無残さをここでも見せつけられた思いであった。

アクロポリスの一画にある当時のオデオンの音楽堂では五〇〇〇人を収容して現在も劇やコンサートホールとして使用されているのとこととであったが恐らく世界で一番古いコンサートホールではないかとこれまた驚きであった。

ユングフラウ

今回の旅行でもう一つ驚いたのはスイスの観光開発であった。

グリンデルワルドに一泊してユングフラウヨッホへ登ったが、この海拔三四五〇メートルまで登るのに全行程がアプト式電車である。ところがその電車がグリンデルワルド（一〇三四メートル）から途中乗継駅クライネシャディック（二〇六一メートル）間は八十六年前に開通し、更にユングフラウヨッホまではほとんどトンネルで貫通し、平均勾配二五度で七〇年昔に開通したとのことである。

ユングフラウヨッホで万年氷のトンネルや階段を通り更に万年雪を踏みしめて頂上に達し、無風快晴に恵まれたアルプスの眺望を満喫できたことは今回旅行のハイライトであったか、これも国の観光政策のお陰であったと感謝したことだった。

結び

ギリシャ時代・トルコ時代・ローマ時代……と先人の遺構を受け継ぎ、更に時代／＼に応じて改良、工夫をこらし磨き上げつつ伝えてきた処に世界の今日がある。百余年の昔バリの大博覧会に日本がチョンマゲ姿で参加した当時、すでにエッフェル塔が聳えてあり地下には縦横に大下水溝が完備していたときく。

ヨーロッパは先進国だなあ！と深く感じた次第である。

明治維新で日醒めた日本も先輩達の努力で今日世界水準に達した。まさに追いつけ！追い越せ！国民総力を挙げての努力の賜と思う。

（春日建設社長）

『ふるさと村』開村記



「ふるさと村」に移築した近藤家別邸

須原 清

(市島・中竹田)

昭和五四年一〇月二〇日午前一〇時、外房線特急わかしお四号は、東京駅地下ホームを出て錦糸町近く地上に出ると雲一つなくぬけるような青空である。

同行の松山竹水老と足立正氏との三人は、やおらブランドーXOを舐めながら、昨一九日久しぶりの台風被害の案内軽微であったこと、また今日の晴朗を喜びあった。

過密開発気味の車外風景も千葉駅を過ぎるとさすがにのんびりした田園風景になり、暖かい小春日和の中に点在する民衆、木立と田畑がふと丹

波路を偲ばせる(小山なきを如何せん)。

予定どおり一時一五分茂原駅着、出迎えのバスに乗り込み、西方へ約二五分目的地長柄町「ふる里村」へ。

御招きいただいた伴仲信次御夫妻に挨拶し今日の佳日を祝し、当村のシンボルマークともいえるべき「コミュニケーションセンター」(旧スイス大使館邸・前号参照)のテープカット式に臨む。

一五〇名あまりのかわいい幼稚園児の鼓笛隊の演奏を皮切りに、レマン湖に模してつくられたというプールの中央部サイドに設置された中央会場では、漸く開村式典の幕が明き、スイス、日本両国歌の吹奏に続いて、村長相磯氏の挨拶に初まり、駐日スイス大使(Pierre Cuenod)、当村と姉妹村提携のスイス連邦リヴオー州グランヴオー村村長(Albert Flotron)、等々の祝辞が相つぎ、その間会場周辺で謹聴していた人々のうちには、時節はずれの暑さ(?)と会食時のズレに業を煮やしたのだろうか、木蔭の芝生へ移動するものがかかなりあった。

待ちかまえた「開村」のテープカットが終り鏡割の儀で乾杯が始まると、一同は三々五々水辺に設けられた屋台(やきとり、そば、すし等々)、華かに盛付けられた料理の並ぶテープル目がけて娯集し、或いははおぼり、或いは杯を重ね観を尽した。特に旧スイス大使館邸を建設した若き日の伴仲氏にとってはまことに感慨深いものがあつたようだ。

さて腹ものども工合よくなったころ、当の伴仲氏の案内で同氏ゆかりの新装なったコミュニケーションセンター(旧公町)へ。日本建築の粋をきかした建物は、外観内部共、申し分なく、よき素材によき技術(匠)の

コンビニエーションよろしく、感謝の一語につきます。

伴仲氏の操縦する車にて村内の直名CCのハウスを参観、これまた精美を尽したロビー、浴場、ロッカールームに一驚。同行の三人は皆田駅まで車で送ってもらい、帰途についた。

新宿駅西口、小田急ヘルクの『豪華』で、松山老の主唱で乾杯、本日のおき開村式を記念し、お互いの健康を祝福した。

東北にて（近況報告）

大野 善三

仙台へ転動してきて三年半になる。東京にいる頃、取材のために東北を旅することは幾度あったが、この地方に深く接することはなかった。昔から、白河以北一山百文とやや侮蔑気味に評価されてきたところだが、性来が浮草なのか、あるいは順応性に富んでいるといったいいのか、この地が気に入っている。農耕主体の生活文化だから、比較的閉鎖傾向ではあるが、気にしないでズカズカ入っていくと、人々は親切で気が置けない。構えることもなく、暮しやすい。

東京にいる頃は、科学産業部などという、少々お堅いセクションで番組づくりをしていた。子供の頃から、理数に弱く、科学からは逃げ歩いて過した方だが、どういふわけかNHKに入局して十五年余り、専ら科学番組の制作に苦斗した。お蔭で、多少難しい科学知識を耳に

しても、アレルギーを起こさずに済むようになっていた。放送のことだから、高等数学と対決したり、化学の亀の甲と真正面から取り組むわけではない。「自然のアルバム」だとか「科学ドキュメント」などという、各地へ出歩いて番組を作るといった程度のことではあった。

東北に来て、仕事の内容が一変した。これまで全く関心の無かった農業問題を考えたり、民謡のルーツを探訪したりする日常である。東北各県へ中継車を配置して、各地の盆踊りをテレビで紹介したり、あちこちにラジオ・カーを走らせて、朝から晩まで東北の人々の生活や町村の表情を伝えるラジオンをやったりして、放送マンとしては、充実した生活を送っている。

去年の春のことだった。今もてはやされている民謡が、一体いつ頃から唄われ始めたのか、ひとつ探ってみようじゃないかと、同僚たちと、ローカル番組の企画をたてた。もちろん、民謡はその名の通り、人々が唄い継ぎ、語り伝えたものだから、ほとんどは読み人知らずであり、起源不明である。その中で、東北の民謡でも十数曲は、起源のはっきりしているものが見つかった。

私が担当したのは、山形県の民謡「最上川舟唄」がどんなきっかけで出来たのかを探ることであった。ご存知のように、この唄は「エンヤコラマーカセー……」という掛け声が長く続いたあと「酒田いぐさげまめでろちゃ……」と、追いつけ節が声高に唄われる爽快な民謡である。

以前、最上川には明治の中頃まで、長さ二十メートルばかりの帆かけ舟が積荷を乗せて上り下りしていたという話を聞いたことがある。上流から米、木材を酒田港へ運び、その還りには、流れに逆らって船



大野善三氏

が山形に住んでいるが、当時わざわざ川に舟を浮べて昔の気分を想像したり、夜遅くまで検討し合っていたと、身内の人たちは話してくれた。こうした事情から、この唄は全くの創作ではないが、渡辺氏が歌詞に手を入

に綱をつけ、海産物や塩を奥地まで曳っぱりあげていたというのである。「最上川舟唄」は、当然その頃に船頭たちが唄っていたものだと思いきんでいた。ところが、民謡研究家の竹内勉さんや地もと山形県大江町の郷土史家に聞くと、この唄が作られたのは、昭和十六年であったという。

戦前、仙台中央放送局が川に因んだ唄の特集番組を企画したことがある。最上川にも伝えられている舟唄がないものかと、放送局の職員が山形県左沢（今の大江町）に住む詩人、故渡辺国俊氏に問い合わせた。渡辺氏は、日頃から木挽き唄をうたったり、浪花節をうなるのが好きな農民、故後藤岩太郎氏に相談。二人で、古老を訪ね歩いたが、昭和も十年を過ぎると、明治の唄を体験した人は少なくなっていた。ただ、老人たちのうる覚えの口づさを聴きとっては、お互いに確認し合い、こんにちの「最上川舟唄」の原型を構成していったという。今も、二人の子孫

れ、後藤氏が唄いやすいように曲を直した、いわば新編曲の民謡だといえる。

いつの頃から唄われ始め、誰彼ともなく伝えられてきている民謡の中にも、このように、特殊なきっかけで特定の人によって作られるものもあることを知った。

丁度昭和十六年に、柳田国男を団長とする東北民謡試聴団なるものが各地を歩き、数々の民謡を聴いて、その保存に力をかけたことがある。団員の一人であった民謡研究家の町田佳声さんに話をきくと、「作曲家の信時潔さんもその一員でね。最上川舟唄を聴いて、やけに感激しちゃってね。これぞ、ヴォルガの舟唄に匹敵するものだ」と激賞したものです」ということであった。

きょうも、仙台市の東隣り、多賀城市の体育館で「NHKのど自慢」の予選会が行なわれた。いつものように、司会の金子アナウンサーが中心になって、四百人余りの出場希望者の歌を聴いて審査しているのが惜しい程、上手な人が沢山いる。東北は民謡の宝庫だとよく言われるが、唄の数はともかく、民謡好きは多く、層も厚い。昔から自然条件がきびしく、土の匂いの強い環境が唄を育て、唄い手をはぐくんできたからなのだろう。

いま、そんな雰囲気の中で仕事をし、楽しく日を送っている。

（NHK東北本部制作課）

懐かしいクラス会 — 遠阪小学校クラス会 —



遠阪小学校クラス会一同

足立 治

(青垣・杉谷)

大正十四年遠阪小学校を卒業したクラス・メイトが六月十七日青垣町市原の『あまごの家』に集まりました。

私にとっては、卒業以来初めてのクラス会でしたが、ヤー、オーで通じる親しみに幼なじみならではの味わえぬ友情を感じ大変うれしく思いました。長い人生にはいろ／＼なことがありましたが、ともかくこうして会えたことを喜び合い、懐かしい思い出話に花を咲か

せたり、砂山を合唱したり、すっかり六〇年前の悪童に返って、時の立つのも忘れ楽しい一日を過ごしました。
会員の中には、正美先生に教わった方もあると存じますが、先生は現在遠阪保育園長として活躍しておられます。

ふるさとの松茸狩り

木村 つた江

(市島)

五十四年十月二十一日に亡父の七回忌の法要がとり行われる為、夫と共に帰郷の予定で二十日の午前六時発のヒカリ号の切符を買い、姉妹等へのお土産も同意して心待ちしていました。ところが突然十九日に二十号台風が襲ってきて、どうなる事かと心配しましたが、この台風がまれにみる速度の早い台風だった為に、翌日の朝は昨夜の嵐は嘘のようにカラリと晴れ上っていてホッとしました。しかし、新大阪まで八時間かかり、また福知山線の連絡が悪く実家に着いた時はつるべ落しの秋の陽がとつぷりと暮れた夜の七時頃でした。

実家に着くと、姉等も心配して待っていてくれ神戸の兄や氷上町の姉も来ており、東京の弟夫婦もその夜十時過ぎに帰郷しました。やはり新幹線が大幅に遅れたのをばやきながらも、久々で七人の兄弟姉妹が同伴者も含めて十数人打ち揃い、まるで数十年の歳月がタイムトンネルを通り抜けて眼前に現われたような気分になり、深夜までワイ

〈ガヤ〉と大へんなさわざでした。

さて翌朝は待望の松茸狩りでした。モンペにズック靴のいでたちで、一行はめい／＼がビクイドコ（竹の小さなかご）を肩に喜々とし、山をかけ廻りました。そして一時間も経った頃、山の中腹に集っている気配、どうやらそれぞれ数本は採れた様子です。私は昔とったきねづかで少々イバラやウラジロが生い茂っていても平気でどん／＼頂上近くに登り、フトある好奇心にかられて子供の頃祖母から近づいてはいけないとかたく止められていた「ちぢばくずし」をみたさに横道に入りました。と、ほのかな香りがあたりに漂っているような気がしてじっと瞳を凝らすと、数メートル先に番傘を干したようにズラリ



松茸の群れとつた江さん

と並んでいるではありませんか。狂喜して思わず大声でさけびました。弟がいち早くかけつけて来てカメラを向け、シャッターを切り、次々に松茸との出会いのシーンをカメラにおさめ、一行が山を下り始めた頃、私は一本抜きとりビクイドコに丁寧に納めました。そして先程のちぢばくずしの探険はまたの機会にしようと山を下りました。

ところで村の長老から聞いた話ですが、松茸は赤松の一生を六十年と仮定して始めの二十年

つまり幼少時代は生えず、次の二十年（青壮年時代）にだけ生え、後の二十年（中老年）は生えなくなるのだということです。この話は何となくうなづける話ではないでしょうか。それに付けても、ここ数十年来めっきり生える量が減り続けているように思われます。

昭和十六年春、現在の夫と中野に新居を持った頃、秋には必ず郷里の父から木のリンゴ箱（石たん箱ともいった）に一パイの松茸を送ってくれたものでしたが、今にして思えば夢のようです。昭和二十年の終戦をさかいに年を追って農薬の散布が激しくなったせいとか、昔よく生えた山の山裾には全く生えなくなり、尾根に近い処には幾らか生えるとか、九月頃適度な雨が降り、十月に入って温度が低くなればいいとか、いろいろな説が山持の家の人々の間で交わっているものの、はっきりしたきめ手がないようです。何とも微妙な丹波松茸、それだけに香りも一段と優れ、ます／＼珍重がられるのも当然かと思われま

す。私にとって今年父の法要にあやかっ、贅沢な遊びをさせて貰ったと改めてふるさと丹波に感謝しております。

☆

☆

☆

前がき ある秋の一日、銀座で松山さんにお会いした時『人生に区切りをつけて、初心に戻るのも悪くないから、過去を整理しておく後半が楽になるよ。』といわれた。私自身は、過去を振り返るのはまだ早いと思うし、人様にお話する程の豊富な体験があるわけでもなく、自分のことはなるべく話したくない、という性格でもあって、全然書く意思はないからと、お断りしていた。しかし、お話をしているうちに、うまく説得されてしまい、それでは私も上京して丁度二十五年になることだし、過去を顧りみて、人に知られて困るということだけは何もないので、仕方なく大先輩の言葉を素直に聞き入れて、拙い文章を綴ることにした。

日本舞踊ひと筋(上)

舞踊家 西崎 祥

(柏原)

一、上京までのこと

英語教師の父をもち、四人姉妹に弟が一人という中で育った私は、物心つく頃から踊ることが好きであった。そんな私を、母は戦争が終ると篠山の師匠、西川霞富美師の所へ連れて行き、学校の成績が落ち

ないこと、途中で投げ出さないことを条件に、苦しい家計の中から稽古に通わせてくれることになった。

師匠は、人一倍芸事の好きな人で、芸のこと以外には全く欲の無い人だった。田舎の師匠で置くには惜しい人だと、よくいわれていたが、本人は都会に出て、名声やお金を得ようとはしなかった。踊りの稽古以外にも、わたし達子供に三味線や鼓の手ほどきをしてくれたり、お芝居の話など聞かせてくれるので、私は稽古場に居る時が何よりも楽しく、人の稽古の分までも、見ていて全部覚えたり、蓄音機を回すなど、お手伝いをするのが嬉しくて、家に帰るのが遅くなり、母にはいつも小言をいわれていた。

二、芸の道は一生の勉強

最近私も、人に教える立場になって、基本というものが如何に大切であるかを感じる度毎に、この師匠のことを有難く思い出すのであるが、中でも『芸の道は一生が勉強よ……』というのが口癖で、御自分も毎月京都まで稽古に通い、決して自分の芸に満足することなく努力を惜しまれなかった。

そんな姿が強く、私の心に残っている。また『踊りをやるなら三味線が弾けないと笑われるよ……』と、長唄の稽古に行くことを勧められ、まだ三味線が膝にのらない時分から踊りと並行して習ったお陰で、唄や口三味線が身についたこと、また踊りにとって最も大切な「間」というもの、面白さや、難しさが判るようになったこと等、今になって役立っていることが随分多いと思われる。

三、こわれた養女の話

ある時、師匠から、私を養女にしたいという話があった。そのころ父が戦後の過労から肋膜炎に倒れ、まだ幼い妹や弟がいて、とても踊りどころではない生活だった。私も子供心に、私だけが好きな踊りを習っているのが心苦しく、さすがに稽古に行くと母にもいい出せず、寂しい気持ちでいた時だっただけに養女になれば、家族の者と難れて暮らすのは悲しいが、ずっと踊りが続けられるのなら、その方がいいかなあーと、内心のり気でいたのだが、父が反対した。

『親が一番大変な時に、子供を養女にやっては後で必ず後悔するだろう。病気が治り、生活も落ち着いてからゆっくり考えよう。月謝のことなど心配しないでいいから、稽古は続けなさい。一旦やり出した以上は、どんなことがあっても最後までやり遂げなさい。』
そういった父の言葉に私は嬉しくて泣いた。そして、その時から稽古に対する心構えが違って来て、ますます意欲が湧いてきたのだった。

この父に、一度だけ『止めてしまえ!』と叱られたことがある。やはり父は、病気がまだ回復せず家で寝ていた頃のことである。

私は舞台で「越後獅子」を踊り、ちらしのところで布晒

を振って見える賑やかな個所にきた時、つい晒に氣をとられ、一瞬振りが判らなくなってしまう。ヒヤッとしたが晒をふる手は休めず上下に振りながら、必死で心を落着けて音を聞き、自分を取り戻した。この間違いを知っているのは師匠だけで、見ていた他の人達には何も気付かれなかったことを終えてから知り、ほんと安心したのだが、帰って父の枕元で、その時のことを得意気に話して聞かせた私に、父は激しく怒った。

四、ごまかせぬ本当の芸

『人にごまかした芸を見せて、悪いとも思わないでいる。そんな心掛けで踊るのなら止めてしまえ!。そんなお前の踊りなど見たくない。』私は、思いがけない父の言葉に驚き、震え上った。側にいあわせた母も一生懸命なだめてくれたが、何故父ががそんなに叱ったのか、私には理解出来なかった。

父の叱った本当の厳しさが判るには、時間がかかった。人の前で踊るということは、自分のすべてをさらけ出すことである。性格は勿論、精神的な面や生活までも踊りには現われる。心の中に、欲や、媚や、ごまかしの気持ちが少しでも混っていれば、それは本当の芸ではない。踊る人間の心構えが、如何に大切であるか見る人が見れば、すぐに判ってしまう。価値のないものは通用しないし、人に何の感動も与えない、技術だけがいくらうまくても、本物の芸とはいえない。

当時の私には勿論、そういった意味など判る筈はなく、ただ『お前の踊りなど見たくない。』といわれたことが悔しくて、負けず嫌いの私は、ようし、いつか必ず



西崎祥さん

『良い踊りだったよ。』と、いつてもらえるようになるうと、自身にいい聞かせたことを覚えてるし、そのことが一つの目標にもなっているのだが、現実には、まだ／＼程遠くて、今では、父の存命中には、とても叶わぬことだと諦めている。

しかしその後も、この時の父の姿が私の頭から離れず、生活に追われて横道に逸れそうになった時、心の中で楽な方の道を進もうとした時、また、苦い時は、ただもう踊っていると楽しくて、つい本当の目標を見失いそうになったり、ちょっとばかり人に褒められて自惚れた気持でいた時など、折々に自分を戒め、本来の地道な生き方より出来ずにいる。

五、舞踊は伝統芸能

柏高卒業を目前に、各々が進路を考える頃、私も自分の将来をあれこれ考え、真剣に悩んでいたことが、その頃の読書日誌などからも伺える。それまで内外の文学作品や小説ばかり読んでいたのが、当時のベストセラー『女性に関する十二章』の伊藤整をはじめ、古谷綱武、武者小路実篤、矢内原伊作、串田孫一、羽仁説子、河盛好蔵、三木清など人生論、随筆、『……の生き方』など人間の生き方に関する書物を著しく多く読んでいることから察しがつく。

一人でも早く親元を離れ、父の負担を軽くしたいという気持は強かった。アルバイトをしながら東京の大学へ行っていた姉の意見なども参考にして、まず、やりたいことをするには自活して、生活の基盤を固め、自分の力で勉強を始めるのが先決だと考えた。

田舎で師匠の跡を継ぎ、人情深い人々に囲まれていれば、安易で苦

勞はないだろうが、芸の道が、そんなものでないことは判っていた。辛い厳しい修業を積んで様々な苦勞を乗り越えて、やっと一人前になるという、田舎で少し位い、うまいといわれたって、井の中の蛙であって、世の中で通用するとは思えなかった。第一に自分でも、体の底から思い切り踊ったという実感のないのが物足りなかったが、その足りない物が何であるのかが判らない。それに当時田舎では、芸事は一般に遊芸くらいにしか認められず、次元の低いものに考えられていたことにも疑問があった。

日本の伝統芸能である日本舞踊が、そんな値打ちのないものである筈はない。都会で理論的にも基礎から学び直し、本当の踊りというものを見極めたい。一生かけて勉強するに値するものが、自分の目で納得したい。その為に必要ならば、進んで自分を鍛えてみよう、どんな苦勞も厭うことはない。自分を試してみたい。修業に堪えられてこそ、はじめて信念をもって、自分にやれるかどうかの判断も着くだろう。踊りが芸術の域まで高度であるものなら、一生かかっても近づきたい。例え到達することが不可能でも、一生の目標を持ち続けて、生きていることが出来れば、私の人生は仕合せではなからうか、人生に悔いだけは残したくない。生意氣盛りでもあり、世間知らずだった私は、こんな考えを持っていた。

『君の踊りはものになるよ……。』

『芸をやるなら都会に行かなきゃ駄目だ……。』

私に助言して下さった高校の先生の言葉が、影響していたのかも知れない。

六、TVの西崎緑に！

そんなある日、三味線の稽古の帰り道だった。八幡通りにある電機屋の前でテレビに映っていた踊りを、チラッと見て足を止めた。その頃はテレビもまだ家庭にまで普及せず、町でも電機屋で見かける位で、非常に高価な物だった。ちょっと近寄って画面を見た私は、息が止まるかと思う程、強い衝撃を受けた。



西崎祥の会「夕立の雷」(54・7・ABC 会館での公演)

『アッー・これだ！こういう踊なんだー』長い間、頭の中で私が探し求めている踊りがそこにあった。とても信じられなかった。やっぱり都会では、もうこんな踊りが出来ている！それを見付けた時の驚きと喜び、それが何の踊りだったかは覚えていないが、その時見た初代西崎緑の踊りにガンと頭を殴られた思いであった。やっぱり都会に出よう、何とかしてあの先生の弟子

になろう。私はその時、はつきり上京の決心が着いたのだった。

七、上京の決意固まる

そして、まず東京で自活する為、就職口を有田喜一先生にお願いして、お世話いただき、卒業と同時に上京することになった。十年もかわいがってもらった師匠との別れは、中でも一番辛かった、お許しを得るため、母と篠山に、病床の師匠を訪ねた。手離なすのは辛い、何とか考え直して欲しいという師匠の深い愛情を改めて知り、悲しみを堪えて話されるお顔を見ると、私の決心も大きく揺らいだ。しかし私も、

『二年か二年、社会勉強をして、都会で新しい舞踊のセンスを学び、納得がいいたら必ず戻ります。そして、その時こそ私も真剣に、自信をもって跡をやらせて頂きたい。』

ということを長時間かかってやっと話し、了解を得た。師匠も、きつと待っているからと、約束して下さって、私どもが断るのも聞かず、病気の体でバス停まで送って下さった。お互に泣き／＼手を振って別れたその姿が、この世の別れになるとは――。

それから一年足らずで、師匠は亡くなり、私には帰る所がなくなってしまう。永久に約束が果せなくなってしまうことが申し訳なく、いつも心の中で手を合わしている。

さて、上京した私は、その後の私にとって、最も強く影響を受けることになった二人の偉大な人物に逢うことになった。それは、作曲家の山田耕作師と、我が師、西崎緑のお二人である。

次号でこの今は亡き両師の思い出を読んでいたきたい。

西崎祥の会 盛況

わが柏原町の生んだ名花などという芸名のような響きを与えるが、実際は西崎流の名舞踊家西崎祥である。祥さんは二十五年前から踊りを勉強したくて上京、初代西崎緑に師事、十年後祥舞会を創立、昨年十周年を迎えたのを機会に記念番組を組んで七月二十一日東京芝のABC会館において公演を行った。当日の番組は西崎緑若、西崎藤、西崎磨利の賛助出演を得て、『外記猿』を始め、九題をこなしたあと『西崎祥の会』を発足し、初代西崎緑の振付による長唄『簞の桜』と『夕立の雷』の二題を熱演して観衆を魅了したものである。郷友の有志もこの公演に賛助して生花を飾り激励の席で拍子を送っていた。

芸術家常岡幹彦日本画展

開く

柏原町出身の日本画家常岡幹彦氏の個人展が五四年八月六日―十一日間、東京、日本橋の中央公論画廊で開催。出品作品は雲湧く（十五号）の大作を始め、霧雨に耕す、雨に煙り咲く（各十号）など水墨画を含めて計二十点が展示されていた。わが郷友多数が声援かたぐい会場を賑わし、数点買い上げる風景も見られた。

短

歌

藤本 久一

（西脇市）

旅先の奇遇にえにし深まりて炎えしづかなる一期のよしみ
青年は素直に育ち感じ事言うはしばしに自信くゆらず
宿りしてみ祖の靈に灯を献じ合掌せしは汝一人のみ
裾わ行く南蔵王の桜紅葉天に映り地に映り静けし
紅葉せるけわしき蔵王を写さんとかる萱かげに絵具溶く妻
三山越元高くかかれる虹の裾わ小雨と移りて我らその中
富士が嶺は棚引く雲の匂やかにひんがし白く北もは蒼めり
一天晴の無風に富士は雲隠り描けぬ無念も雲さわの秋

ヨーロッパに旅して

秋元 多美子

（米上）

名に高きベルサイユ宮殿目のあたりまぶしきまでに光り輝やく

余りにも立派な宮に驚きつ古代文化の粋を集めて

古きより進みし文化フランスの街々に見る像の多きに

パリの町街路灯まで美しく通り／＼の色もきめられ

エッフェル塔広きところにくつきりとそびえ建ちたる姿うるわし

名に高きトレビの泉美しく彫刻ありてあざやかに立つ

ナポリ湾小高い丘に登り来て静かな水にしばしたゝづむ

ヴェルサイユ見事な品々眺めつゝあきることなくジッとたゝずむ

ヴェスビオス火山の噴火物凄くポンベの遺跡なにか語りて

ポンベの遺跡たづねてはる／＼と彼地に着けど雨の激しく

昔より文化の進みしポンベの遺跡眺めつサウナ風呂あり

法王の儀式行うパチカンのステンドグラスにしばしたゝずむ

フランスの粋を集めてルーブルの美術の館立ち去り難し

美しき美術の品々足とめて時の足りぬをいまさら惜しむ

モンブランローブウエイで登りつゝ真白き山にしばし見とれる

銀世界モンブランより見下してシャモニーの街も今は小さく

国際の列車は夜のジュネーブをローマ目指して広野を走る

オーロラの白く美し景色ありアラスカ上空今通りつゝ

▼本の紹介▲

『十年の歩み』TOC婦人子供服協同組合史

足立会長の業績躍如

東京都の城南、五反田にそびえ建つ十三階の東京卸売りセンター（TOC）の十二階は、いま、ファッションの一大殿堂として婦人子供服の「協業の成果」と日々の業績に結実させて賑いを呈している。

この「協業の成果」と「合理化」を旨として発足したのが十年前のTOC婦人子供服協同組合の結成であった。以来、同組合発展に理事長として組合のトップに立って苦闘を続けてきたのが、外ならぬわが郷友会会長の足立三治氏である。

足立氏は率先自社つるや産業KKを同センターに出店し、同業各社と協力して今日の盛業を見るに至っているが、その十年間の成果を大成したのがこのファッショングループ12『十年の歩み』である。

本書にはその十年にわたる苦闘の連続が関係各氏によって詳細に綴られておる。特に競合相手、四十余社が、自己の利害を克服しつつ、協業と合理化をモ



ットーとして、十年間に素晴らしい業績をあげつつ今日に至った実績はまことに立派という外はなく、他の協同組合運営にも貴重な参考になろう。

しかも、今日の業績を築くに至った指導者が足立会長であり、本書の随所に各氏によって語られていることは、われら同郷人にとつても喜ばしい限りである。

昨年十一月の郷友会総会に参加された方々には、足立会長から寄贈された本書をお持ち帰りを願ひ、大変感謝されたが、なお残部を本会事務所に保管してあるから、御希望の方はお問合せ願ひます。(足立正記)

(A5・美装幀・二六一ページ・グラビヤ十枚挿画、製作二玄社非売品)

『氷上郡の文化財』

本書は題名の示す通り、氷上郡内の文化財の一大集成である。氷上郡教育委員会設立十周年の記念事業として企画されたもので、編集委員に、各町の文化財審議委員、同公民館責任者、及び教育委員会の村上彰氏始め関係者によって編集されたものである。

従つて、その内容も氷上郡全部に亙る神社、仏閣を始め、名勝、史蹟などの貴重な文化遺産、その中には遼身寺にある数多くの国宝、重要文化財なども含まれており、それ／＼に鮮明な写真と解説文も加え

てある。まことに至れり尽せりの文献である。郷里にある者も、域外で働いているわれ／＼にとつてふるさとのすばらしい文化遺産に接する機会が与えられたことを編集委員諸氏に感謝せずにはいられない。ただ残念なことに、発刊部数が限定されて、申込者全部の希望に添えなかった由で、出来れば再版の機を与えられて多くの氷上人の手に渡ることを期待したい。(松)

(A5倍版・総アト二五八ページ、全ページに写真解説付、非売品、氷上郡教育委員会発行)

津留六平著『再建工作』

筆者の本名は中井良平氏。大正十二年生れの柏原出身との事、東大を出て三井銀行に入り、京都支店長、理事を経て、日本保証サービス常務の職ある。本書は昨年、日本経済新聞社の第一回日経経済小説の懸賞募集の当選作に選ばれ、日経に連載されたもの。内容は京都を舞台に中小繊維加工会社の経営破綻をめぐる、銀行や取引先の関係者の織りなす人間模様を、銀行マンの鋭い感覚で綴ったもので、連載当時かなりの反響を呼んだ作品のようである。(松)

(B6・二五〇ページ・価九五〇円 日本経済新聞社刊)

関東氷上郷友会の沿革

本会は明治二九年（一八八六年）十一月二日、東京神田の料亭において創立の発会式を行なったといわれる。

当時東京帝国大学の学生安藤広太郎（後の農学博士）、同田昌（後の大蔵次官）氏らの奔走によつて結成、会長には旧柏原藩主織田信親子爵、副会長に田健次郎男爵（元台湾総督）が就任。会の目的は、東京における郷土出身者の親睦と友情を深めるとともに、郷里氷上郡の開発発展に寄与することにあつた。以来七十余年、幾多の曲折を経ながらも今日まで存続し得たことは、先輩各位の郷土愛のためのもので、とくに井上雅二、矢本平蔵、小谷哲、石橋治郎八氏らの功績を逸することはできない。

昭和二八年一月二八日、東京新橋駅楼上の「日本食堂」で戦後第一回の「氷上郷友会」が開催された。百名を超える郷友が喜々として集い、戦中、戦後の飢餓と混乱、生死を生き抜いた郷友たちが、相擁して久闊を叙し、熱っぽい雰囲気であることや、ありし世代の苦

悶を語る感激の大会となつた。

田健次郎会長（昭和五年没）のあと久しく空席であつた会長の椅子は織田信大子爵、安藤広太郎農学博士とひきつがれたが、この歴史的大会において石橋治郎八石橋生系社長を会長に迎えた。石橋会長は以来十八年間の長期に互つて郷友会発展に腐心され、昭和四六年八月、八三歳をもつて逝去された。本会は昭和四六年十一月、つるや産業社長足立三治氏を会長に迎え今日に至つてゐる。

関東氷上郷友会会則

（名称）

第一条 本会は関東氷上郷友会と称する。

（目的）

第二条 本会は会員相互の親睦を図り、併せて郷土の発展に資することを目的とする。

（会員）

第三条 本会は氷上郡出身者及び縁故者を会員とする。

（役員）

第四条 本会に左の役員をおく。

名誉会長 一名

顧問 若干名

会長 一名

副会長 若干名

常任理事 若干名

理事 若干名内二名会計担当

監事 二名

（役員の仕事）

第五条 会長は本会を代表し会務を統轄する。副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは副会長の互選により一名がこれに当る。常任理事及び理事は会務を執行する。

監事は会務及び会計を監査する。顧問は会長の諮問に応じ本会の発展を促進する。

（役員を選出）

第六条 会長及び役員は総会において選出する。

顧問は理事会の推薦により委嘱する。

（役員の任期）

第七条 役員の仕事は二年とし、重任を妨げない。

（役員の仕事）

第八条 本会の役員は総て名誉職とする。

第九条 会議は総会と理事会に分ける。

総会は毎年一回十一月に開き必要に応じ臨時総会を開催する。理事会は会長、副会長、常任理事及び理事を以て構成し、必要に応じ会長が招集して開催する。

(会費)

第十条 本会の会費は年額金一〇〇〇円とする。

別に必要に応じ理事会の決定による額を徴集することができる。

(寄附金)

第十一条 寄附金は理事会の承認により受納する。

(会計報告、会則の改正)

第十二条 本会の会計年度は毎年十月一日より翌年九月三十日迄とし、会計報告は十一月の総会において行なう。

本会則の改正は総会の議を経て決定する。

常岡文亀画伯逝く

柏原出身・日本画壇の逸材

本誌『山ざる』第2号以来表誌画を寄稿され、「山ざる」の紙価を高めて貰っていた常岡文亀画伯はかねて療養中のところ、昨五十四年十月二十九日逝去、密葬に付された。第10号に寄せられた表誌画「茄子」は遂に絶筆となったものである。ここに本会を代表して謹んで哀悼の意を表する次第である。行年八十一歳。同画伯は柏原町出身。東京美術学校日本画科を卒業後、結城素明先生に師事、母校に招かれ教授となる。この後文展審査員、大日本美術院同人等日本画壇の重鎮として活躍されていた。その間帝展に『鶏頭花』『棕櫚』など出品、特に『カンナ』は特選となり母校に飾られている名作である。他に在外公館等に飾られ異彩を放っているといわれる。郷土出身の日本画の大家を失ったことはまことに無念というほかない。なお葬儀告別式はさる三月八日午後一時から飯能市の自宅で行われ、本会からも多数郷友が参列し同画伯の功績に感謝しご冥福を祈った。

父、文亀のこと——常岡幹彦

満八十一歳の誕生日を迎えて半月後、昭和五十四年十一月二十九日午後三時十五分、父は心不全で黄泉の客となった。丁度かかりつけの医師の往診日であったが、死の直後に来られた老医師は、ただ一言「大往生ですね」とつぶやかれた。私はアトリエで仕事で、家内は茶の間にいる間の出来事であった。私の尊敬する評論家の言をかりれば「ポツンと切れる木綿糸のような死」であった。かつて恩師山本丘人先生が御母堂を亡くされたとき、ポツリと悲しいのかどうかよくわからない」と知人に洩らされた言葉を私はフツと思いついていた。

父はいわゆる世間智とは無縁で、どちらかといえば孤独を好む人であった。人と会えばそれこそ精一杯気をつかうので、従って会合等には誠に不精であった。これといってとりたてて趣味はなかったもので、一人で花と向かいあっていることが、唯一の楽しみであった。ことに晩年は縁先で黙然といつまでも植

木に見入っていることが多くなった。

父の花好きは、小学生の頃から小使いの大半を種や苗に費やしたそうで、柏原の厄除祭の夜店で買い求め、小倉の家の前栽に育てた大王松など見事であった。第二次大戦前は滝野川に住んでいたが、広い庭はすべて瓦で囲んだ花壇であり、台風の手報でもあれば、花壇の周囲に足場を築いてそれに、ムシロを張りめぐらした用意周到な対策ぶりは誠に徹底し、見事なものであった。しかし、それを手伝わされた私は子供心に、台風の度にうんざりしたことを覚えていた。郷里丹波に疎開してからは、さつまいも作りに熱中、これも苗の床から始まり、温度計ではかったり、又一



ありし日の常岡文亀氏

つの畝の中や高さを倍以上にして大収穫をあげたりした。ただし、此のように熱中している時は趣味の段階を通り越して、本業の絵は、催促されようが、誰が何と言おうがサッパリ棚上げであった。

もう再び父と話すこともない。此の原稿を依頼されて、山ざる第二号から十号までの表紙画を陳べてみた。二女社渡辺さんのお骨折れもあって大変原画に近い。栗から始まり、松茸、かきつばた、紅梅、南天、落のとう、葱ほろろ、水仙、茄子の九枚それぞれに思い出がある。最初るとき(第二号)、父は逗子海岸で病氣療養中であつた。私が墨、筆、色紙等持参して、ベッドの上で描きあげたのが『栗』であつた。そして「絵のうまい爺さんがあるぞ」と病院中有名になってしまったのも、今は思い出である。昭和四十五年であつた。此れらの表紙絵をみると、一人の人間が、この十年の間——生きた、描いた——証拠であつて、つづやきを聞く思いである。その『つづやき』は第七号の『落のとう』から始まり『水仙』で頂点になる。

この数年間、父はよく「死」を口にした。死をみつめはじめてからの作品を私は最も好む。

一氣に描いた『水仙』は熱氣と妖氣を感じるが、一年後の『茄子』は寂しくふり返っている。(茄子一ヶの為ではない)体力の衰えであろう。何日も何日もかかったこの茄子一ヶを私は複雑な氣持でみた。山ざるは(の表紙は)これでオシマイ」と父は言つた。それから、とうとう筆をとらなかつた。その後、自分で丹精した「月下美人」を、うつすらと写生したが、作品は『茄子』が絶筆となつた。「月下美人」を写している父の姿は、もう余命幾許もなし、と覺つた人が、暗夜に白く浮かび咲いた美しくはかない花の、今の姿を心からいつくしんでいるようであつた。

昨秋、私は秩父正丸峠に近い山村に家を建てた。引越しの当日、新居に着いて父を車からかかえおろした時、秋のあかるい日ざしの中でホヤッとして笑つたうれしそうな顔を忘れることが出来ない。それからおよそひと月で帰らぬ人となり、子供達のみ集つて密葬した。枕辺に、今は葉ばかりの「月下美人」の鉢を置いた。

百ヶ日に当たる三月八日の葬儀には、ふるさと丹波より、円成寺方丈様に御足労頂くことになつてゐる。(昭和55年1月24日記)

五四年度総会開く

盛会裡に新役員を選出

昭和五四年度総会は同十一月二十三日午後一時すぎから、祝寿の会に引続きABCホールの大宴会場で足立会長を始め地元から石井氷上町長、小森同議長ら、五十数名が出席文字通り足立会長の挨拶、梶浦氏の乾杯のあと伴仲副会長の許で開かれた。

経過報告から議事に入り別記の五十三年度決算を議題とし小谷正己財務理事の説明通り承認、ついで役員改選に入り満場一致新役員を決定、それから、柏原の生んだ日本舞踊家西崎祥さん、同優さんら四名による民謡踊り黒田節ら六曲を披露満場の拍子を浴びて会場を湧かしたあと、酒杯を傾けつゝ、お互いにふるさとの話などに花を咲かせ、同三時すぎ盛況裡に散会した。

尚、この総会席上、足立会長の加盟しているTOC婦人子供服協同組合史『十年の歩み』五十冊が寄贈され一同に頒布した。

◎総会出席者名（敬称略）

五四年度祝寿の会・総会に出席された方々は次の通りである。（於アサヒビル3F）

西川政一

菊池武利

菊池夫人

石井敏秋（氷上町長）

小森健吉（氷上議長）

西山徳治（市島町長）代理

杉本喜八郎（春日町長）代理

足立三治 小谷正雄 小川晴通 秋元多美子

足立卓己 小田富士夫 小田明子 渡辺幸子

篠原よね子 伴仲信次 上田鉄太郎 上山頭

谷垣正雄 松山幸逸 須原清 足立正 吉住

重造 林谷集 若森敏郎 梶浦浩二郎 小谷

正己 坂上勝朗 坂上豊 坂上明 佐々木盛

雄 植木伍鹿 小糸イキ 常岡幹彦 笹倉郁

子 山内隆行 小林剛 音無太美子 村上豊

村上大憲 足立謙吾 安井三善 喜田綾子

荻野晴一郎 藤原三郎（代理） 余田貞雄

安原美智子 田中寛 芦田信明 木村つた江

西崎祥 他3名 計55名





秋田民謡「花笠音頭」向って左から渡辺真子、西崎優、山本裕子、西崎祥の皆さん

◎新役員決る(五四・一一・二三)
五四年度総会において選ばれた新しい役員は左の通りである。

関東氷上郷友会新役員

名誉会長 有田喜一

顧問 荻野定一郎・生駒篤郎・上山 顯

西川政一・小谷正雄・小林武治

会長 足立三治

副会長 渡辺金三・伴仲信次・松山幸逸

監事 竹村政雄・須原清

理事 永井常資・山中心一郎・村上末吉

前田和市・荻野 武・足立 正

小谷正己・植村章子・足立誠一

木村つた江・常岡幹彦・高見嘉都

司・村上大憲・足立かをる・林谷

集・谷垣正雄・渡辺隆男・田 英

夫・足立 徹・上田鉄太郎・芦田

律子・山本清士・吉住重造・(新

任)坂上勝朗・小田富士夫・小川

晴通・田中篤郎・下中昭男・秋元

多美子・西崎祥・足立謙吾



昭和54年度総会スナップ

自 昭和53年10月 1 日
至 昭和54年 9 月30日

昭和54年度 会 計 報 告 書

関東氷上郷友会

収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	摘 要	金 額	科 目	摘 要	金 額
繰 越 金	前期より繰越 現金 43,542 振替貯金 419,882	463,424	出 版 費	山ざる10号製本印刷外諸掛り1554冊	603,193
会 費 収 入	317名	420,000	通信印刷費	総会役員会通知書印刷送料他	176,776
広 告 収 入	会誌山ざる10号広告掲載料32名	265,000	支払手数料	振替貯金払込手数料73件	18,725
寄 付 金	足立会長, 小林武治, 村上末吉, 高橋博子, 小谷正雄, 荏正衛, 植村章子, 渡辺金三, 上田鉄太郎, 芦田有功, 横山忠, 福島輝子, 近藤勇	119,000	総 会 費	S53. 11. 17 於東郷記念会館会場費, 会食費	250,700
受入手数料	明治生命代理店収入1ヶ年分	240,000	長 寿 祝 費	長寿者祝品銀杯4個 16,000	64,000
総 会 費 収 入	5,000×46名 230,000 10,000×4名 40,000	270,000	雑 費	丹波新聞新年広告掲載料	10,000
雑 収 入	役員会会費残金 21,110 山ざる発行懇親会残金 16,350	37,460	繰 越 金	現金 83,172 次期繰越 振替貯金 488,318 普通預金 120,000	691,490
合 計		1,814,884	合 計		1,814,884

計 報

昭和五十四年中御逝去の報に接した会員は十一月二十九日常岡文亀画伯を始め左の諸氏であります。謹んで哀悼の意を表します。

山本 徳治氏 二月 八日

中島 淳氏 三月二十五日

栗原 重次氏 六月二十三日

石井 久吉氏 七月 十日

足立 弘之氏 十月 十八日

新会員紹介

足立澄子（氷上・黒田）さんより左記お知らせを受けました。ありがとう存じます。

高取 由美子さん（青垣） 千田川崎市高津

区野川三二三四―一千代田生命野川寮A―四〇二一

八木 重光氏（柏原・母坪） 千140東京都泉川区東大井町六ノ一二ノ九三和荘内

（紹介者 服部恵三氏（柏原）

お便り・短信

春日建設KK三十周年を迎う

本会事務所が間借りしている『春日建設KK社長伴仲信次氏』はさる昭和二十四年六月の設立以来順調な歩みをつけ、本年会社創立三十周年を迎えた。その間「真面目な業者」を社旨として中堅建設業者に独歩の地歩を築き、今日までの受註工事で完成したものは百数十件に上っている。その中には長命寺

伴仲信次氏



（江東）長泉寺（文京）源宝院（芝）平等院（木更津）本敬寺（千葉）大泉院（大宮）等の寺院建設が以外に多いのは会社の特技ともいうべきかも知れない。それはさておき会社は創立記念行事として十一月七日国立劇場に顧客ら二百余名を招待盛大な観劇会を催して感謝の意を表した。

音無 太美子さん（春日）

昨年二月柏原の厄神さんの日、黒井の実家の兄が柏原の日赤へ入院致し、年老いた母が一人留守する事になりましたので、私は普段遠く離れていてやさしい言葉も行いも出来ていませんので、この際そばへ行って何でもどんな事でもハイ、ハイ、ときくのが親孝行だ

と思つてまいりました。四月新川堤の桜の満開をなつかしい昔の想い出偲びつつ見まして、帰り約五十日程の故郷生活でございました。

湯かげんはと耳をすませば風呂呂の中

極楽々々と母云ひ給う

ゆっくりと云い足りたごと横になり

九十六歳氣晴れたるや

田舎家の広きあちこち杖おきて

老母思う兄入院の今

和歌山の親戚のお葬式にまいりまして

老親と三兄残し逝きたる夫の棺ふたあけ

堀のけ出てこんと泣き

八十翁いんきよで幾年ありたるに

息子の逝きてあわれふるい立ち、

久々に湯かげん問わる田舎風呂

中と吹き口で話ははずむ

夏休みに新潟の娘の嫁ぎ先へ内孫小四と小

二のやんちゃ坊を連れて遊びに行き、

手ですくうメダカに喜々と叫ぶ子等

せき落つ音ときそいかしまし

那須高原へは家族皆でまいりまして

見はるかす雑木林の山荘に

霧立ちこむる山並を見る

えびがにをとると云いて出で行きし

帰らざる子を探し歩きぬ

昨年の台風は大変でして荒れ狂う中で……

台風に倒れそうなる庭の木をしぼりて

嫁と安堵し笑みたり

近作です。

書道する机に茶菓をそつとおき

立去る嫁のうしろ拝めり

亡き夫の日頃使ひし電気いす

ありし日偲びそつと座りぬ

残月を淡く残して冬晴れの

清しき朝に真白き富士見ゆ。

村上 末吉氏（春日・中山）今まで二十年

余住み、第二の故里ともいえる東中野を去る

のはいささか心残りでしたが、今度の所は京

王線芦花公園駅から近いことがとり得て決心

した次第です。

〒157 東京都世田谷区南島山二ノ三三ノ二

植村 章子さん（春日・長王）病氣の方は、

よかつたり、悪かつたりして二ヶ月を過し

ましたが、その後追々よくなりまして、この

頃では元の体に快復いたしました。十日毎に

医師の診断と服薬し、その間ハリ医にかかり

週二回通っています。案外よさそうです。二

十一日から一週間ほどで帰京の予定です。二

十四・五日は京都で「風」（細見綾子女史主

宰）の俳句大会があり、この機会に郷里へも

墓参にいったり、法事にも参列の予定です。

（五四・一一・一九）

野村 虎男氏（柏原）左記に転居しましたの

で本会を退会させて頂きます。愛知県知多

郡東浦町森思上今池三ノ四一

係より〓関東以外の地区に移転されて

も、退会の必要はありません。出来れば

退会せずにご懇親願います

国村 きぬゑさん（柏原）十一月三十日よ

り中華民国訪問全日本教育書道代表团に加わ

って研修のため出発します。

古倉 克実氏（柏原）建築中の社屋がこの

程完成、左記により業務開始の運びとなりま

した。これを機に業務の改善とサービスの向

上に努める所存です。移転を機に社名も変更

いたしました。

新社名 ハタリ機販株式会社 代表取締役

新杜名

(旧社名「古倉環境技術研究所」)

船橋市松ヶ丘一ノ四(電〇四七四一六三一
九二九一)

渡辺 政子さん(水上) 静岡城内小学校の
二、三、四年生の子供の世話に追われて、趣
味という程の時間も持てずにいますが、二年
生の子供が四年生になるころには、必ず何か
自分をブツつけていけるものを見つけたとい
と、いまから楽しみに主婦業に専念しております。

山本 紀子さん(山南・太田) わたくし、
最近幼稚園を小さくしたような幼児教室に勤
務し始めたのですが、さる十月十八日は台風
の日でありましたが、休園とならなかったた
め園児の八割近くが登園して来ました。

何しろせっかく登園した幼児ですから、無
駄にしないように保育を行い、弁当も食べさ
せて、スクールバスで送り帰すことになりま
した。

さて、いつもバスに乗って下さる先生が早
退されたため、私がバスの補助席に乗りまし
た。何しろ午後一時過ぎの一番風雨の凄まじ

い時だったので、アッという間に洋傘がこわ
れてしまい、やむなくコートを幼児の頭にか
ぶせて、軒下待つ母親の手に届ける。こん
なことを二時間近くかかってやっと送り届け
ているうちに雨風はおさまりましたが身体は
ぬれぬずみとなりました。

その日から数日後になって身体をこわして
静養を続けましたが、親、兄弟に電話をしよ
うにも、遠い関西在住の者ばかりで急場の間
にあいけません。そんな時郷友会からご案内を
頂きましてほんとうにホッとした感じで、し
ばしなつかしく郷友会の存在のありがたさを
しみんと覚えた次第でした。

福島 輝子さん(旧姓 横田 市島・中竹
田)

この度、竹林すまこ様より御紹介頂きまし
た者です。六十余年前に上京、その間満州の
ハルビンなどに住んでおりましたが終戦で引
揚げて参りました。

須原清様、永井輝江、竹林すまこ様のおか
げで、この会に入会させて頂きますこと、本
当にありがとうございます。今後ともどうぞ
よろしく。

お礼の印として金五千円寄附いたします。

橋爪 忠氏(水上・黒田)「山ざる」ありが
とう存じます。

五四―七年度会費と「山ざる」の費用にお
使下さい。一五、〇〇〇円送ります。

(昭和三年生れ、(株)三葉水道代表取締役)

三宅 良夫氏(春日・棚原) いつから未納
になっているか判りませんが、広告料とも送
ります。

経理担当より「会費として五三一九年分
七〇〇〇円、広告料二〇〇〇円と処理し
ました。

尚、二年前に転居しました兄「三宅博」の
住所は下記の通りです。

大田区西嶺町一三三

ミヤケ電気 電〇三―七五八―二六三八

山本 一志氏(青垣) こちらに来て二十年
になります。

会誌を読み、その中になつかしい方の名前
や活躍しておられる多くの方々を知り「ふる
さと」を一層なつかしく思っています。

妻も氷上郡出身ですので会員に加えて頂きますようお願いします。左記です。

山本八重子（旧姓・足立）氷上町稲畑、
昭和二十三年八月一日生

伊田 光男氏 現在、入院生活を送っております。

病床にあつて「山ざる」を読み、なつかしい故郷に思いを馳せることが出来、胸が熱くなりました。制作者のご努力に深く感謝しております。早くよくなつて皆様にお会い出来るよう養生に専念しております。（五四、六、五）

榎本 康子さん（山南・岩屋）会誌をはじめて頂き、大変ふるさとなつかしく、また生れたところを誇りに思いました。主人の転勤で東京に九年間、そして今の茨城県鹿島に来て四年になります。三年前にマイホームも出来、第二のふるさとなりそうです。名簿に記入もれの分を左に記しておきます。

生年月日 昭和十五年四月二十三日、旧姓・和田 趣味・読書・手芸

足立 和己氏（青垣）会費を毎年一〇〇〇円ずつの納入では面倒ですので適宜まとめて納めるようにいたします。

尚、五〇〇〇円送ります。何年度分までか、お知らせ下さい。（回答すみ）

久米 裕氏（柏原）「山ざる」を始めて配布され、昔なつかしく読みました。担当者のご苦勞感謝いたします。

藤田 千治氏（市島）玲子さん（氷上・御油）二人分の会費、五四年分送ります。

今日は宮城沖地震一年目です。お互いに日ごろの防災につとめたいと思います。（六、一一）

矢持 七郎氏（春日・鹿場）「山ざる」どう行き違つたものか、或いは会費未納の爲か、一度もお目にかかれなかった。この度第一〇号を始めて受取つた。ふるさと丹波をなつかしく思い出しながら、会員各位のご活躍ぶりや随筆を楽しく拝読いたしました。

係より会誌は毎号送っております。爲念。

田中 茂雄氏（氷上・成松）「山ざる」10号を拝見。始めて会の存在を知りました。ご発展を祈ります。

尾上 典世氏（春日・野村）私ども家族一同、三人の孫ともく七人の家庭が明るく暮せるといふことは、個々が信仰を持ち、何のために生きるという、人生の正しい指針のもとに、人さまの爲に貢献出来る毎日が、健康に恵まれ、楽しく人生の生きがいを感じる毎日です。

坂上 登氏（氷上・新庄）立派な会誌です。なつかしく読ませて頂きました。仙台へ来て二十年近くなります。東北大学電気通信研究所（工学博士）に勤めております。

安達 規氏（山南・若林）関東在住者の多いのに驚くと共に意を強くいたしました。案外、自分の近くにふるさと出身の先輩や後輩が居られ、機会があればお訪ねしたいと思つたりしています。（大正十五年生れ）。三ヶ年の会費を送ります。

大西 泰子さん(山南) ふる里を離れて盛岡、仙台、松江、岡山、金沢、神戸、東京へと移動して、いま「山ざる」を手にしております。

大変なつかしく、ふる里を思い出しながら一方ではふる里を持たないわが子に、家庭の事情とはいえ申訳なく思いつつ「山ざる」を通じてふる里の良さを説明しております。

畑 延雄氏(春日) 故郷に老母をおいたまま、東京勤務が多いため、関東に永住の構えしております。

昨年、日本棋院から初段の免状を貰いました。ゴルフは十年來やってはいますがいっこうに上手にならず、最近足熱意を喪失しております。

小中 克己氏(市島) 郷友の近況を会誌を通じて身近かに感じています。長崎と茨城を行ったり、来たりです。楽しい生活で、飛行機の旅もすっかり馴れました。「山ざる」について一言。

一、名簿には、アイウエオ順の見出しをつ

けて下さい。
二、郷土の記事が楽しみです。盛り沢山になるよう望みます。

若森 敏郎氏(山南・上久下) 職業柄、外国に出かけることが多く、ラオス、トルコ、フィリピン、ベネズエラなどを飛び廻っております。十二月二日ころは多分再びフィリピンに出張しております。(電源開発KK海外勤務)

好本 信子さん(柏原) 両親は健在で柏原に生活しているのに、なかなか帰柏出来ず、やっと今夏四年ぶりに帰りました。

すぐ近くにある柏原高校をぐるりと廻り歩き、随分変わったことに驚きました。子供を母にあずけて友人に会い、とてもなつかしく、卒業以來始めてという友人にも出会い非常に充実した里帰りになりました。

これからは両親への孝行も兼ねて年に一度は訪ねなくてはと心に決めております。

吉田 勇司氏(市島・酒梨) 現在旅客業務課長見習中(ルフトハンザ航空) および結婚

式のあと始末中で多忙を極めている。(一一・一四)

由良 洋太郎氏(市島・梶原) 永井輝江さんは私と同村でもありますので、八十歳のお祝を受けられる会には参列いたし度く存じましたが、当日他に婚礼があり、残念に存じます。左記へ転住ようやく落つきました。

〒郷所沢市久米一三一七ノ四六
電話〇四二九一二三・八五二九

山中 岩雄氏(青垣) 四月から半年間、長野県上高地のホテル(帝国ホテル・レストラン会計課)に出向していました。十一月に東京に帰って来ました。

山田 貞子さん(春日・黒井) 関東へ来てまだ五年くらいです。最近「山ざる」誌や同窓会の案内に接することが出来るようになり、意外な人にお目にかかる機会もあったりして、なつかしく思う昨今でございます。

村上 喜寿氏(柏原) 主人は三菱重工業会社から現在海外出張中です。いつもお世話に

なり、ありがとうございます。

宮崎 文子さん（山南・谷川）東京住いを始めて十年余り。こちらには親戚もなく心細い思いをいたしておりましたが、会報や「山ざる」をお送り頂いてから、先輩、同級生、後輩と、同じふるさとを持つ方々が沢山いらつしやるのを知って、心の中が豊かになり、心強い気持でうれしくなりました。（八王子・東京天使病院 准看護婦）

松枝 勝氏（市島）去る六月から大病にて、現在まだ療養中です。

足立 敦子さん（柏原）さる九月に前橋市から館林市松原一ノ五フコク生命内に引越しました。総会にも一度出席させて頂きたく思っておりますが、幼い子が二人おりますので、失礼させて頂きます。

足立 澄子さん（水上・黒田）親子四人、平凡な日々を送っております。

地元出身の多くの方々がおられるので心強く感じています。次の方も同郷の方です。

〒211川崎市高津区野川三二三四―一
千代田生命野川寮A―四〇二一
高取 由美子さん（青垣町出身）

青田 垣氏（青垣）祝寿会、大変結構な催しですが、当日連休を利用して特許事務所の所員一同の慰安旅行で出かけます。ご盛会を祈ります。

青田 律子さん（青垣・稲土）福知山で独り留守をしております八七歳の老母が株講をするというので、総会前後は丹波に帰りま

す。

秋元 多美子さん（水上・常楽）さる八月末に娘の主人の大阪転動のため、手伝いかた／＼丹波の両親の墓参にまいりました。

年ごとに故郷がなつかしく、姉と一諸にお墓でゆっくりと思い出を語り名残りをおしみつづつ帰って来ました。

天野 清子さん（水上・谷）文化の秋、読書の秋、私はコーラスの秋と週二回、練習に励んでいます。市民（千葉市）合唱祭に向っ

ての特訓の最中です。家事も忘れての本当に楽しいひとときです。

生駒 篤郎氏（柏原）腰痛のため月のなかばは熱海市西山町二一ノ二〇中銀ライク西山マンション五一号に養生にいらっています。

岩井 要氏（水上・石生）勤務の関係で転勤し、年が明ければ広島県呉市に行きます。

植木 伍鹿氏（山南・和田）先般の総選挙で自民党にあき足らず、一野党を後援し一票を投じました。また今般の自民党総裁選挙の派閥的権力抗争を見て強く国民的怒りを感じながら、なおどうにか政権維持が出来たことに安心感を持ち、まだ野党に全面投球も出来ず、片足残った身分をもどかしく感じながら如何ともなすことが出来ません。

現在世界中がつぎ／＼に物騒な事ばかり起り、浅間山の大噴出のような平和が一度に破壊されるような不安を感じ心から人類みな平和でありますように祈ります。

久保 智洋氏（山南）明治大学に一年間通

学しましたが、昨年より島根大学理学部に学んでおります。

大江 範子さん（東京）「山ざる」をいつもなつかしく拝見しております。時折りしか丹波へはいけません「山ざる」の中に丹波の山川を思い出しながらなつかしんでおります。

河本 弘子さん（氷上・谷）さる四月より主人が関西に転勤で今後は出席出来かねます。関東に戻りましたらご連絡いたします。よろしく。

菊池 洋子さん（氷上・幸世）十一・十二月は演奏会（音楽家）が忙しく飛び廻っております。祝寿の会、心からお祝い申し上げます。

岸本 光弘氏（氷上）来年春には武蔵野美術大学院を卒業、就職する予定です。

常岡 亮氏（柏原）さる十月末に墓参と叔母の病氣見舞のため帰省しましたが、帰省の

度に街のただずまいが美しくなるに眼を見張る思いがいたしました。

東後 一美さん（加西市）昨年夏、大病のため三ヶ月余病院生活を送り、その後すべての職業とも別れ現在ブラ／＼療養中です。

富江 里栄さん（氷上・石生）主人の転勤に伴ない、この春から香港の任地に赴任、同行しておりますので当分お目にかかる機会がないと存じます、海外駐在中の留守宅は次の通り。

〒594大阪府和泉市弥生町一ノ八ノ九

徳田 八郎衛氏（柏原・新井）この夏の合では柏高三二年卒業の集まりが少なく、どうも残念に思いました。

富沢 章氏（柏原高校音楽女教師）昭和二十三年三月柏原女高を去ってから三十二年、いまだに便りや同窓会に招待されたりで、丹波の思い出は今も続いております。

野村 千里さん（氷上・幸世）さる五十二

年夫利吉八九歳が病没以来、三男夫婦の柿の木板の自宅で静かに暮しております。孫も六人になりましたし曾孫も一人出来ました。丹波の山奥から上京して、主人も東京の土になりました。永い間、皆様のお世話になりありがとうございます。

畑 時美さん（春日・鹿場）第一、第三土曜日が公休になりますので、希望者でゴルフの会をやつては如何かと思ひます。コースは予約出来ると思ひます。よろしく。

林谷 集氏（氷上・石生）一昨年家をすっかり改築し次男夫婦と同居しております。孫（男一年二ヶ月）が生れ、夫婦とも仕事を持つておりますので、家内と二人がかりで世話をしております。日曜、祭日以外は外出しにくく好きな囲碁の方もごぶさたしておりますが、株に興味を持ち、僅かな資金で、ぼけなように頭を使っております。

伴野 秀予さん（夫剛敬氏）とも氷上出身です。（柏高卒業）主人はカナダ出張中であります。

東田 実氏（山南・上滝）三十年勤務した精巧写真製版所を昨年六月退社、さる五月、現在の林製作所に勤め頑張っています。

淵上 網蔵氏（市島・三輪）町内会長のため、雑用に追われて、趣味の方も思うにまかせず悔んでおります。

近藤 哲夫氏（春日・東中）上京以来まる二十年になり、富士見産商（株）も順調に発展しております。

佐藤 公子さん 来春左記へ転居の予定。
横浜市緑区鴨志田町八〇一―六三

坂本 正幸氏（春日・多利）今回の総選挙では丹波から一人の代議士も選出出来ず残念至極。

莊 正衛氏（柏原・屋敷）先般、京都嵐山で催された関西水上郷友会に出席した際、水上郷友会創立当時の資料を見せて頂いた処、明治三十四年前後、亡父が会員として記載さ

れており、加えて関連記事をも散見してなつかしく、驚きました。

八十年の時間の経過と、歴史の不思議を思わずにはおられませんでした。（京都在住）

田中 憲雄氏（柏原・石田）目下、野村証券徳島支店に単身赴任中。

高野 康慶氏 第二十五回ピアノ発表会をいたします。

高見 安寿氏（春日・棚原）長年勤続していた忠勇（酒造）K・Kを定年退職いたしました。

お願い！

年会費（一〇〇〇円）をお納め下さい。
会費は本会運営並びに会誌「山ざる」の発行費にあてています。「ぜひともご協力下さい。」

ご送金がないと『山ざる』誌は危機に類し、発行不能の事態も起りかねません。どうかよろしく御配慮を願ひ上げます。

塚口 智也氏（水上・沼貫）当地（仙台市大同生命支社）に赴任して三年になります。東京へは残念ながら出かけかねます。

谷垣 尚氏（柏原）さる六月勤務先（城水鉄工所）が変更まして家族ともども北九州市へ転居しました。長女は美術大学在学中なので、東京に残っております。

小山 清子さん（山南・谷川）時折り西宮の方へ帰ったり、染色教室へ通ったりしております。

小林 剛氏（市島・北奥）相変わらず若い人たちと一緒に乗馬をエンジョイしています。半日ぐらい乗り廻しても疲れを感じません。

小西 允子さん 旧姓竹内（山南・北太田）高校卒業以来、同期生との交流もなく、その手がかりもつかめず淋しい限りでした。もし横浜市近辺に在住の方がありましたら知りたいものと常日頃考えておりました。

岸部 正己氏(春日・朝日) 私も東京での生活が三十二年になりますが、近くにこんなに多く郷土の人がおられることを「山ざる」を拝見して、驚くと同時に心強く思っています。あと十数年は現在の生活(小平保健所勤務)が続くものと思いますので、どうぞよろしく。

可部^{カベ} 美智子さん(柏原) 秋は毎年、女流陶芸展(京都美術館)出品のため忙しくしております。とくに本年は三つも展覧会が重なり閉口しました。出来るだけよいものを作りたいと励んでおります。

(係り) 作品(写真)を「山ざる」に送って下さい。

勝野 きしのさん(春日) 三十年にわたり、福祉の仕事一筋に従事して参りましたが、本年三月退職いたしました。私の生き甲斐としてひたすら務めて参りましただけに、安堵の気持ちと、うしろ髪をひかれる思いにさいなまされて一時はどうすることも出来ませんでした。その後夏ごろからはやっと解放感を味わって自由な日々を過しております。

光山 秀子さん(水上・石生) 本郷に五十四年居住していましたが、都市計画によって、この八月、杉並区西荻北一ノ二ノ一に引越しました。本年三月から病氣にかかり歩行困難で出かけかねています。

森田 淳二郎氏(多紀郡篠山) 本年六月一日兵庫県学生寮尚志館々長となって夫婦で学生と起臥しています。

現在のところ水上郡出身者二名、多紀郡六名、他は神戸方面の都市学生が大半です。丹波の学生は深尾須磨子さんの表現によると「松柏類」だけあっておとなしいが、いざというときはなか／＼の熱情と行動を示すようですが、丹波からもっと学生を送り込んで下さい。

畑 武司氏(春日・野村) さる八月に丹波で同窓会が久し振りに開かれ、関東水上郷友会の存在を守田功君より多き大変に嬉しく、「山ざる」と送って頂きました。

私の恩師であり、大先輩の村上末吉様も仕事(商業施設、企画設計監理、施工)の關係

でご指導に預かっております。

直田 正氏(柏原) 主人は現在デンマークのコペンハーゲンに転勤となり下記に住んでおります。二、三年は滞在の予定ですのでその間、貴会との交流は出来兼ねます。

しかし、主人は普段より大変貴会のお知らせその他に関心を持っておりますので出来れば左に記住所直接ご通信でされば幸いです。

尚、私も来年一月彼地へ赴く予定です。

Drej, gade 26D 6 Sai 2100

Copenhagen, Denmark

年会費領収報告

自昭和55.4
至昭和55.4
12
31

54年度分 安達恭二 安達健一郎 安達巧

足立敦子 足立一之 足立要 足立玉治 足

立疆 足立浩一 足立正春 足立あつ子 足

立勝 足立護 足立幸夫 阿部ひさ子 阿部

すみ江 赤松たつ 秋山米子 芦田あつ子

芦田留治 天野清子 荒木輝雄 荒木恭雄

有田喜一 有田潔司 有田毅 有原美久美
井上陽一 井田光男 井手梅野 井本馨 池
田弥栄子 石倉軍二 石田吉郎 石本美栄子
泉馨子 上田三四二 上野彰子 上山顯 植
木英吉 植木一夫 植木伍鹿 江間時彦 榎
本康子 小田富士夫 小野智恵子 大江範子
大木義則 大久保宏昭 大地富美子 大槻作
治郎 大槻哲夫 大西恭子 大野渥子 岡林
逸男 岡林祐恭 岡本庄太郎 荻野勲 荻野
完二 荻野聡子 荻野武 荻野文子 荻野雄
一郎 音無太美子 加藤信太郎 柿原庸 片
岡泰子 片山日幹 門脇恵子 兼松幸夫 神
野妙子 川勝ふさ子 木下清史 木下昇治
木村つたゑ 菊地顯三 菊池洋子 久米裕
国村まゆゑ 小谷正己 小中克己 後藤春雄
近藤勇雄 近藤田治 近藤敏雄 斎藤陽子
笹倉武夫 里取 塩見需 下井澄子 下中昭
男 正呂地群治 須藤美智子 須原逸郎 杉
山雅章 相田広子 莊克衛 田倉久男 田沢
よしゑ 田中篤郎 田中茂雄 田辺美人 田
淵初雄 田村豊 高桑良弥 高田守 高野孝
子 高野康慶 高橋通也 竹村仲生 竹村政
雄 谷達雄 谷垣博 谷村昭 辻俊孝 土田
直吉 常岡千紗子 常岡文亀 常岡亮 田敏

夫 田英夫 十倉博 東後一美 東郷茂 富
川清司 豊島昭夫 豊島幹夫 中井良平 中
谷幸雄 中西しげ子 中村隆一 西川宣孝
西山敬治郎 野村千里 野村豊 袴塚節子
蓮井春雄 畑光 畑延雄 畑稜 畑義博 久
石幸太郎 久安敏夫 広瀬勇造 福井謙三
福島輝子 藤田千治 藤原岩市 藤原ふみ子
藤原義延 藤本久一 堀井隆川 本田啓右
増野忠雄 松本栄二 松本金吉 松本富子
三浦巖 宮崎豊文 宮崎文子 村上昇 村上
喜有 室井利代 森田節子 諸沢節子 矢本
博一 安田功 安原三智子 柳田完 山内健
次 山岸幸子 山本一志 山本清士 山本徳
治 山本紀子 山本裕子 由良洋太郎 余田
喜重 横田公子 横田逸子 横溝初子 吉田
恵美子 依藤俊平 若森敏郎 渡辺金三 渡
辺隆男 渡辺貴美子

51・56年度分 槌玲子
52・53・54年度分 小田利江 大木正徳
52・56年度分 久保田元子
53・54年度分 片山邦夫 近藤哲夫 須原
清 波多洋三 広瀬五男 広瀬孝太郎 藤田
かね 三崎復造 山口幸夫 余田康人
53・54・55年度分 坂上登 志村勝郎 村
上久夫 安達規 大橋威彦
53・58年度分 橋詰忠
53・59年度分 三宅良夫
54・55・56年度分 井上和三 尾上典也
上田正己 白濱勝康 田中昌子 土屋タイ
能勢次郎 本部真行
54・58年度分 足立和己 芦田有功 荻野
公三 清水正男
54・55年度分 足立治 足立真一 足立誠
一 秋山一男 荻野吟逸 荻野謙一 北山素
純 小寺確郎 児玉安正 鈴木和栄 勢川武
彦 谷口捷 塚口生郷 常岡幹彦 藤田徹
藤田操子 藤原弘行 淵上綱蔵 古川美代子
古倉徹子 古倉克実 松枝勝
55年度分 芦田律子 永井輝江 松山幸逸
吉住重造
55・56・57年度分 大西俊治
56年度分 足立かをる 上田鉄太郎 谷垣
正雄 林田孝子
56・57・58年度分 畑秀子
57・60年度分 小林武治



ある国には 資源がいっぱい埋っている
ある国には 技術があるという
また ある国には……

世界は 別々に豊かさをもっている
日商岩井は そんな1つ1つの豊かさを
結びあわせることで より大きな豊かさを
実らせたいと 考えています

明日のゆたかさを考える



建築材料販売工事

建設大臣登録（般）51 第 1834 号

中央建材工業株式会社

取締役
東京営業所長 荻 野 武

（市島町出身）

本 社 名古屋市千種区若水町 3—26
電話 052 (761) 6181番（代表）

東京営業所 東京都中央区銀座 7 丁目 14—3
電話 03 (543) 8106番（代表）

大阪営業所 大阪市西区鞠本町 2 丁目 4 番10号
電話 06 (443) 6665番

仙台営業所 仙台市高松 2 丁目 1 番15号
電話 0222 (73) 5724番

古典医学・脈診研究・鍼専門治療

杏林堂

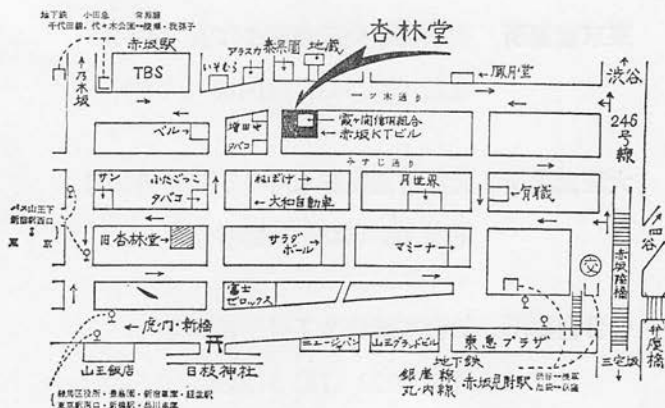
小川 晴 通

赤坂診療所：東京都港区赤坂 3-6-8 電話 (583)1553番

新宿診療所：東京都新宿区西新宿1-26-2

新宿野村ビル5階 電話 (348)0721代表

杏林堂診療室 診療時間の受付は前もって電話にてお約束いたします



LOUISVILLE SLUGGER

野球ユニフォーム特約店

カラフル & トータルラインの
ルイスビル・スラッガー・ユニフォームで
勝利のサイン!!

あらゆるスポーツウェアのご相談は当社へ



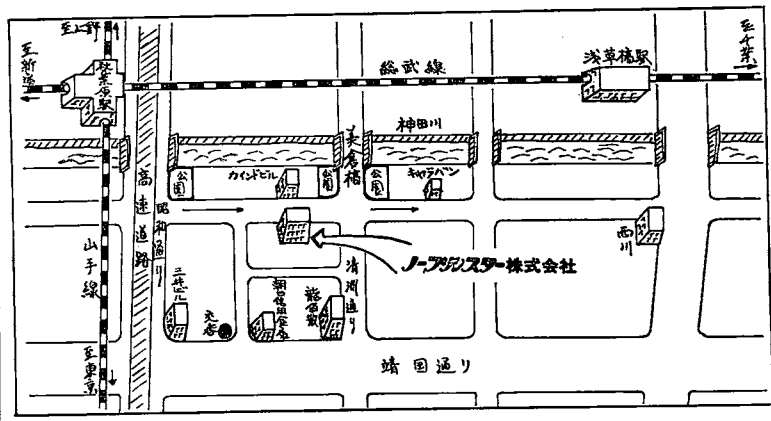
ノーブルスター株式会社

取締役社長 吉住重造

(春日町中山出身)

本社 〒101 東京都千代田区東神田 2-4-7

電話 03 (866) 9121 (代表)



◆エレクトロニクスパーツの専門商社◆

株式会社 三 誠

東京都文京区湯島2-24-13 (834) 3171 (代表)



取締役社長 足立 誠一

☆主要取扱メーカー

日本航空電子工業株式会社

多治見無線電機株式会社

株式会社フジソク

日本開閉器工業株式会社

ライン精機株式会社

本多通信工業株式会社

Sonnenschein

日本海運振興会会長

有 田 喜 一

東京都千代田区平河町二丁目四番
電 話 (二六三) 九 四 一 七 番
東京都世田区成城四ノ一ノ一五
電 話 (四八三) 一 二 〇 九 番
兵庫県氷上郡氷上町谷村
電 話 〇七九五八(二)〇〇〇八番

綜 合 建 設 業

建設大臣許可第 233 号

春日建設株式会社

代表取締役 伴 仲 信 次

専務取締役 伴 仲 信 義

(春日部出身)

東京都千代田区飯田橋2丁目9番3号

電 話 東 京 (264) 4 0 1 1 番 (代表)

日本メキシコ協会会長
日本バレーボール協会会長
アジアバレーボール連盟名誉会長
国際バレーボール連盟副会長
日商岩井株式会社相談役

西川 政一

(住) 東京都杉並区善福寺二ノ三五ノ一六
電話 (三九〇) 一三一六番
(寓) 静岡県伊豆高原
電話 〇五五七―五三一―二五六〇番

学校法人国学院大学理事
国学院高等学校々長
学校法人国学院大学幼児教育専門学校々長
財団法人日本私立大学連盟理事
財団法人私学研修福祉会理事

小林 武治

東京都武蔵野市境南町一―三〇―二〇
電話 〇四二二(三二)四七九六番

調布市社会福祉協議会理事

調布市豊かな老後のための市民会議実行委員
老人問題研究所

木 村 つ た 江

東京都調布市東つつじヶ丘 2-39-5

電話 東京 (300) 1505番

株式会社 つるや洋装店

株式会社 東逗子駅前ビル

東 海 産 商 株式会社

代表取締役 小 谷 正 己

逗子市逗子 1-6-4

電話 0468. 71. 3075

71. 6449

株式会社 近藤写真製版所

取締役社長 近 藤 勇 夫
(国領出身)

東京都新宿区下宮比町8番地
電 話 (260) 6 2 8 1 番 (代表)

< のびのびベビー 子供のファッション >



(株)



〒158 東京都世田谷区瀬田 1-22-19
TEL 03(700) 3 1 2 1(代)



チャウチョ 日 榎

〒158 東京都世田谷区玉川台 1-13-12
TEL 03(708) 1 1 5 1(代)

代表取締役 山本清士 (春日町小多利)

郷友の皆様 生命保険に加入されるなら
ぜひ当会をご利用ください

明治生命保険相互会社 代理店

ひ か み 会

代表 伴 伸 信 次

東京都千代田区飯田橋2丁目9番 春日建設(株)内
電話・東京 264—4011(代)

城下の面影を残す 奥丹波柏原の宿

山菜料理からアマゴ・ヤマメ・鱒・鯉・鮎・等川魚に始まり
香り高い松茸・丹波牛の肉料理、ボタン鍋



日本観光旅館連盟会員

三 友 楼

兵庫県・氷上郡柏原町八幡筋 電話：丹波柏原(07957)②1110～2

客室数17室、収容人員60名、駐車場完備、送迎用マイクロバス

明治生命保険相互会社
本社東京直屬

足 立 正

東京都千代田区丸の内二丁目一番二号
電話(二八三)八一七一〇五番 直通

トヨーサッシ株式会社
東洋サッシ工業株式会社

取締役会長
足 立 徹

東京都葛飾区細田三―八―九
電話(〇三)六七二二二番
(内線五〇三番)

植 木 紙 工 所

代 表 者
植 木 一 夫

東京都文京区白山三丁目一ノ十三
電 話(八一)八五七三番

荻 野 定 一 郎

事務所 東京都千代田区丸の内二丁目二番二号
電話(二九)七〇六二番
鎌倉市御成町十七番
電話〇四六七二一六七四番

日本学士院會員
東京理科大学學長

理 学 博 士
小 谷 正 雄

自宅 東京都新宿区神楽坂一ノ三
電話東京(二六)四二七番
東京都大田区山王三ノ三六番
電話東京(七七)六六五二番

坂 上 勝 朗

中野区白鷺三一五一
電話(〇三)三三九〇八二七番

須原清

東京都中野区南台五の三〇の六
電話(三八一)一六二二番

高見産婦人科

医学博士 高見嘉都司

東京都板橋区熊野町四〇番地
電話(九五六)〇六〇〇番

高見齒科

高見幸男

〒176 練馬区錦町二一八―三
電話 九三三一六七三番

谷垣正雄

東京都杉並区高井戸西一二四―一七
電話(三三三)六一六〇番

黒川木徳証券株式会社

投資顧問 能勢次郎

自宅
東京都中央区日本橋一―一六―三
電話東京二七八―七八五三番
千葉市穴川二ノ三ノ六
電話〇四七二(五)三七八二番

名刺広告募集 協賛広告料三千円

黒川木徳証券株式会社

畑 秀 夫

本社 東京都中央区日本橋一―一六―三
電話 東京(〇三) 二七八―七八四六番

波 多 洋 三

文京区春日二―一七一―二
電話(〇三) 八一一―二八六〇番

日本育英会 東京支所

支 所 長 藤 田 正 雄

〒162 東京都新宿区市ヶ谷本村町四二番地
電話東京(〇三) 二六九―四二六(大代表)
川崎市多摩区王禅寺六七八―四
電話(〇四四) 九五四―四九五七番
自宅

松 山 幸 逸
(竹水)

〒東京都豊島区西池袋四―八―八
電話 九七一―五七四三番

株式会社興水タイヤ商会

取締役経理部長 三 宅 良 夫

〒210 川崎市川崎区元木一ノノ一
TEL 〇四四―二三三六三二(代)

曹 禅 寺 住 職

村 上 大 憲

東京都大田区池上七丁目二三番十号
電話 〇三一七五一―一〇三五番

山中 一朗

227 横浜市緑区美しが丘三一四六一一
電話 (〇四五) 九一一—四四九三番

横山産業株式会社

取締役社長

横山 幸三

東京都江戸川区中央二—三四—六
電話 (六五五) 三九九一 代表

名刺広告募集 協賛広告料三千円

松尾 フ ル ー ツ

上 田 鉄 太 郎

(春日町野山出身)

〒102 東京都千代田区麴町 6 丁目

(国電四ツ谷駅前)

電話 03 (261)—2830 自宅 (264) 5060—1 店舗

完全複製 台北・故宮博物院の名蹟

■法書十二件

- ① 晋・王羲之・奉橘三帖(卷)……………定価三〇〇〇円
- ② 晋・王羲之・快雪時晴帖(冊)……………定価一〇〇〇円
- ③ 唐・孫過庭・書譜(卷)……………定価七〇〇〇円
- ④ 唐・懷素・自叙帖(卷)……………定価八〇〇〇円
- ⑤ 宋・蘇軾等・四名家小品(冊)……………定価三〇〇〇円
- ⑥ 元・趙孟頫・閒居賦(卷)……………定価四〇〇〇円
- ⑦ 元・張雨・七言律詩(軸)……………定価四〇〇〇円
- ⑧ 明・祝允明・慶誕記(軸)……………定価四〇〇〇円
- ⑨ 明・文徵明・醉翁亭記(軸)……………定価三〇〇〇円
- ⑩ 明・董其昌・杜甫詩(軸)……………定価五〇〇〇円
- ⑪ 唐・懷素・千金帖(卷)……………定価九〇〇〇円
- ⑫ 宋・蘇軾・黃州寒食詩(卷)……………定価五五〇〇円

■名画二十件

- ① 唐人・宮樂図(軸)……………定価三〇〇〇円
- ② 五代・丹楓呦鹿図(軸)……………定価五〇〇〇円

- ③ 宋・范寬・谿山行旅図(軸)……………定価二五〇〇〇円
- ④ 宋・郭熙・早春図(軸)……………定価一〇〇〇〇円
- ⑤ 宋・崔白・雙喜図(軸)……………定価二〇〇〇〇円
- ⑥ 宋・米芾・春山瑞松図(軸)……………定価二五〇〇〇円
- ⑦ 宋・劉松年・羅漢図(軸)……………定価一五〇〇〇円
- ⑧ 宋・馬遠・雪灘雙鷺図(軸)……………定価一五〇〇〇円
- ⑨ 元・吳鎮・洞庭漁隱図(軸)……………定価一五〇〇〇円
- ⑩ 元・王蒙・具区林屋図(軸)……………定価六〇〇〇円
- ⑪ 元・倪瓚・容膝齋図(軸)……………定価一五〇〇〇円
- ⑫ 元・趙孟頫・鵲華秋色図(卷)……………定価一五〇〇〇円
- ⑬ 元・黃公望・富春山居図(卷)……………定価一五〇〇〇円
- ⑭ 明・王絳・山亭文会図(軸)……………定価一五〇〇〇円
- ⑮ 明・沈周・廬山高図(軸)……………定価二〇〇〇〇円
- ⑯ 明・唐寅・山路松声図(軸)……………定価二〇〇〇〇円
- ⑰ 明・仇英・仙山樓閣図(軸)……………定価四〇〇〇円
- ⑱ 明・董其昌・葑涇訪古図(軸)……………定価一五〇〇〇円
- ⑲ 清・王翬・溪山紅樹図(軸)……………定価四〇〇〇円
- ⑳ 清・惲壽平・做倪瓚古木叢篁図(軸)……………定価一五〇〇〇円

内容案内呈



二玄社

東京都千代田区神田神保町2-42/千101
振替東京4-28782/電話(03)263-6051(代表)

日本名跡叢刊〈全百卷〉 小松茂美監修 各一七〇〇円、
二七〇〇円

書跡名品叢刊〈全二百卷〉 西川 寧監修 各八五〇円、
神田喜一郎監修 一八〇〇円

拡大法書選集〈既刊十点〉 各1、3分冊 各九五〇円、
一一〇〇円

書道講座〈全八巻〉 各一五〇〇円

書道技法講座〈既刊四十冊〉 青山杉雨、
村山三島他編 各一六〇〇円

書の歴史 中国篇 伏見冲敬著 一八〇〇円

和漢書道史 藤原鶴来著 一五〇〇円

書道の古典〈全三冊〉 大東文化大書道
文化センター編 各六〇〇円

名跡六体
大字典書源 藤原鶴来編 一八〇〇円

名筆字典 水島修三編 三〇〇〇円

禅林語句鈔 碧庵周道編 一三〇〇円

中国書論大系〈全十八巻〉 中田勇次郎編 各三八〇〇円、
六〇〇〇円

會津八一書論集 長島 健編 一八〇〇円

中国書道史随想 松井如流著 二五〇〇円

書を志す人へ I・II 今井凌雪著 各一五〇〇円

吳昌碩 人と芸術 吳東邁著・足立豊訳 二〇〇〇円

齊白石 人と芸術 齊白石自述・足立豊訳 二〇〇〇円

蘭千山館書画〈全二冊〉 二玄社編 五三〇〇〇円

金石家書画集〈全二冊〉 西冷印社本複刻版三二〇〇〇円

日本金石図録 神田喜一郎監修
大谷大学編 一八〇〇〇円

文士の筆跡〈全五巻〉 瀬沼・松井他編 各三〇〇〇円

王鐸の書法 條幅篇 村上三島編 四八〇〇円

吳昌碩の画と賛 青山杉雨編著 四五〇〇円

内容案内呈



二玄社

☆フランス菓子☆スイス菓子☆ドイツ菓子☆

BASEL

●洋菓子・喫茶・食事

国立駅南口店 (銀座通り)

Tel 0425-75-9791

●洋菓子・コーヒー

八王子駅北口店

Tel 0426-44-3583

●洋菓子・喫茶

京王八王子駅前店

Tel 0426-42-8424

●洋菓子・工場

豊田駅前通り店

Tel 0425-81-0824

●ワイン・ビアレストラン

八王子三崎町店

Tel 0426-22-5528

●洋菓子・アイスクリーム工場

奥多摩バイパス店

Tel 0425-44-3911

●洋菓子

多摩川店 (読売ランド下)

Tel 044-944-2214

有限会社バーゼル洋菓子店 社長渡辺圭造

美味無比 木の实酒

栗の三年酒

くり

さん

ねん

しゅ

この木の实酒「小鼓くりの三年酒」は、純粹の丹波産栗の实、梅の实など山野の木の实を原料として秘醸したもので、常用すれば胃腸を整え健康と美容と活力を増進します。

ストレートでお飲みいただきますと、さわやかな梅の香りがひろがり、あと口にはコクのある栗の味が残ります。

お正月のお屠蘇には、縁起のよい「小鼓栗の三年酒」をお用い下さい
キット好評です。

◆ 丹波焼壺詰

◆ 徳用びん詰

1、
35 50
00 00
00 00
ml ml ml ml

小鼓の
西山酒造場

氷上郡市島町中竹田
電話(〇七九五八)⑥〇三三二代

あと が き

▼ことしから八十年代に入っ
たという。新聞やTV、何れ
のマスコミも八十年代とは何
か、と賑やかな問答である。
連綿と続いている時の流れの

中で一瞬にして『桑田変じて滄海となる』歴
史の一大変革が起ることは万々一ある筈はな
い。むしろ十年、二十年、五十年かかって漸
次革っていくのが自然であろうが、近年のよ
うにテンポの早い時代では、そんな呑気なこ
とをいつてはいられないかも知れない。

▼イラン・アフガンなどの中近東の国情の動
きは、極東の日本にも底意味の悪いひびきを
与えつつ、だん／＼險悪の様相を見せてい
る。石油に依存する日本の立場は、誰が見て
も樂觀視されない。とすれば一体どうすれば
いいのか。その選択を政府に委せておけばい
いと簡単に割り切れるものではない。むづか
しい選択を誤れば、太平洋戦争の二の舞を
踏まないとも限らない。こんなことを考えて
いると、三球、照代のいい草ではないが、夜
も眠れない。八十年代を語る人々の話を聞い
ても安心出来ないのが残念というものだ。
▼……それはさておき、「山ざる」の第十一

号を出すことになった。年を追って郷友会も
充実し「山ざる」も少しずつよくなっている
という会員からの便りであるが、どうも満足
出来ない。何とか、多くの会員のニーズに応
える術はないものかと小田富士夫君や坂上勝
郎君に長老格の須原清君を加えてお智恵拝借
ということになった。次号あたりから更に充
実していくことであろう。ご期待願う次第。

▼本号は沢山の寄稿を頂いた。注目を呼んで
いる中国の鍼の世界と日本との関係を語った
杏林堂院長小川晴通さんの力作、数年がかり
で台湾故宮博物院の秘宝の複製に社運を賭し
ている二女社の渡辺隆男さんの苦心談、日本
舞踊一すじに生きている西崎祥さんの話、過

次号メ切り！

会誌「山ざる」第十二号のメ切りは昭
和五十五年十二月末日です。発行は同五
十六年四月の予定です。発行がおくれが
ちになります。お早めに随想、身辺雑
記、紀行、詩文、何でも結構です。お気
軽にご寄稿下さい。写真も添えて下され
ばなお幸いです。
(編集委員会)

般の総選挙の際郷里から立候補して苦斗した
藤原三郎さんの無念記など多彩な寄稿を
得たのがせめてものである。

▼……毎号の表紙画に華麗な作品を寄せられ
ていた常岡文亀画伯の長逝は、何とも哀悼に
堪えがたい。感謝の意をすると共にご冥福を
お祈りする。(竹水)

年金のくらし閑かに年明け

山ざる 第11号

昭和五十五年四月二五日印刷

昭和五十五年四月三〇日発行

編集委員

松山幸逸 足立正 坂上

勝郎 須原清 常岡幹彦

渡辺隆男 小田富士夫

発行所

関東氷上郷友会

東京都千代田区飯田橋二丁目九番三号

春日建設株式会社内 〒102

TEL東京〇三(294)四〇一一番(代)

振替番号 東京 一〇二二三一三〇番

製作 株式会社 二女社

交通事故

もし、あなたが加害者だったら……

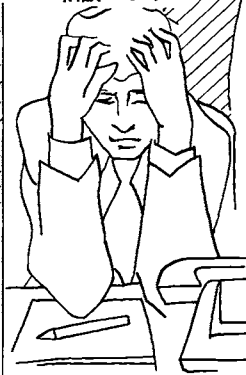
水かけ論の
あげく……



仕事中また
電話がくる……



いったい誰に
相談しよう……



自動車事故の経験がある方なら、おわかりのはずです。事故発生後の不慣れで非常にめんどろな話し合い、ときには「言い争い」、「水かけ論」になってちががきません。こんな悩みをスピーディに解決するのが

AIUの示談交渉サービス

賠償事故が発生した場合、**AIU**があなたのために被害者と折衝・示談に当たりますので、精神的苦痛や時間、費用のむだから解放されます。もしもの時の心強いパートナーとしてお役に立ちます。

示談交渉から保険金のお支払いまでまかせて安心！

AIUの自家用自動車保険

●ご契約条件と保険料例(年払・割引なし)

保 険 金 額				年令条件	自 家 用 普通乗用車	自家用 軽四輪 乗用車
対人賠償 無保険車	自損事故	対物賠償 (免責なし)	搭乗者傷害		自 家 用 小型乗用車	
1名あたり	1名あたり	1事故あたり	1名あたり			
万円	万円	万円	万円	年令を問わず無保	84,800円	49,140円
10,000 (1事故 無制限)	1,400	500	1,000	21才未満不担保	71,490円	42,850円
				26才未満不担保	63,790円	39,130円

※上記以外に各種保険金額の組合せがあります。

※他社から**AIU**への契約移行のとき、他社で無事故であれば無事故割引(最高50%)をいたします。

あらゆる保険について お気軽に ご相談ください



代理店 **永愛友商事** 代表者

〒107 東京都港区赤坂3-1-2 AIUビル 電話585-0740(代)

GRUE BONNE 高級婦人服製造卸
つるや産業株式会社

取締役社長 足立三治

東京店 品川区西五反田 7-22-17番地

東京卸売りセンター12階

電話 (03) 494局3285~7番

本社 川崎市中原区新丸子 7 0 1 番地

電話 (044) 722局6371 (代表)

社長室直通 711局3324